



はん の き い せき  
半 の 木 遺 跡

2000年3月

長野県飯田市教育委員会

# 序

飯田市座光寺地区は飯田市街地の北東部、天竜川河岸から木曾山脈前山の麓までの細長い範囲を占めています。ここでは川沿いの平坦地から段丘面・扇状地などに、比較的広い耕地が広がっています。また、古来交通の要衝に位置しており、古代伊那郡衙である恒川遺跡群などの埋蔵文化財を初め多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のまま後世に伝えていくことが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録に留めることもやむを得ないものといえましょう。

下伊那地方事務所は、松川町から飯田市を結ぶ広域農道の新設を計画しました。工事は、松川町側から着手していて、平成7年度からは飯田市座光寺地区にかかってきました。農道を建設して農業の近代化に対応することは、車が欠くことのできない交通手段であることを考えれば、必要な事業といえます。しかし、当該事業地には数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、半の木遺跡もその一つで、工事実施に先立って壊されてしまうおそれが出てきました。そこで次善の策ではありますが、工事実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなりました。

調査成果は本文で述べられているとおりでありますが、調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご理解とご協力をいただいた下伊那地方事務所と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さん他、関係各位に深く感謝を申し上げますと共に、ここに発掘調査報告書が刊行できますことに対して厚く御礼申し上げます。

2000年3月

長野県飯田市教育委員会

教育長 富田 泰 啓

## 例 言

1. 本書は広域営農団地農道整備事業伊那南部2期地区工事に先だって実施された、飯田市座光寺「半の木遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成8・11年度に現場作業、平成11年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・航空測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、HNKを一貫して用いた。なお平成8年度調査箇所は遺跡の中心地番である1514-1、11年度は1586-2を略号に続けて付した。
6. 本報告書では以下の遺構番号を使用している。竪穴住居址-SB、掘立柱建物址-ST、集石炉-SI、溝址-SD、土坑-SK、その他-SX
7. 本報告書の記載順は竪穴住居址を優先した。
8. 土層の色調・土性については、1996年度版『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
9. 本書に係わる図面の整理は、平成8年度分を山下誠一が、平成11年度分を下平博行が行った。
10. 本文の執筆は第I・II章、第三章(1)を山下誠一が、残りを下平が行った。また本書の編集は下平が行った。
11. 本書の遺構図中に示した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ(単位cm)を表している。
12. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

# 目 次

## 本文目次

序	
例言	
目次	
第I章 経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	3
①調査	3
②指導	3
③事務局	3
第II章 遺跡の環境	4
1. 自然環境	4
2. 歴史環境	4
第III章 調査結果	8
1. 調査の方法と概要	8
2. 基本層序	8
3. 遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居址	12
①S B01	12
②S B02	13
(2) 掘立柱建物址	14
①S T01	14
(3)集石炉	14
①S I 01	14
②S I 02	14
③S I 03	14
④S I 04	14
⑤S I 05	17
(4) 溝址	17
①S D01	17
②S D02	17

③S D03	17
④S D04	17
(5) 土坑	19
(6) 周辺ピット	19
(7) 遺構外出土遺物	31
①押型文土器の出土状況	31
②その他の遺物	31
第IV章 まとめ	49
1. 縄文土器の概要	49
2. 集落の変遷	51
写真図版	55
報告書抄録	71

## 挿 図 目 次

挿図1 半の木遺跡調査範囲	2
挿図2 半の木遺跡調査位置図	5
挿図3 半の木調査周辺図	7
挿図4 基本層序	8
挿図5 基準メッシュ調査位置図	9
挿図6 平成8年度調査区全体図	10
挿図7 平成11年度調査区全体図	11
挿図8 S B01	12
挿図9 S B02	13
挿図10 S T01	14
挿図11 S I 01・02	15
挿図12 S I 03~05	16
挿図13 S D01	17
挿図14 S D02	17
挿図15 S D03・04	18
挿図16 S K01~09	21
挿図17 S K10~16	22

挿図18	S K17~24	23
挿図19	S K25~29	24
挿図20	平成8年度調査区 周辺ピット図(1)	25
挿図21	平成8年度調査区 周辺ピット図(2)	26
挿図22	平成8年度調査区 周辺ピット図(3)	27
挿図23	平成8年度調査区 周辺ピット図(4)	28
挿図24	平成11年度調査区 周辺ピット図(1)	29
挿図25	平成11年度調査区 周辺ピット図(2)	30
挿図26	S B01出土石器	35
挿図27	S B01・02出土石器	36
挿図28	S K01~29出土石器	37
挿図29	S K13・28、 S I02~05出土石器	38
挿図30	S D04出土石器	39
挿図31	遺構外出土遺物(1)	40
挿図32	遺構外出土遺物(2)	41
挿図33	遺構外出土遺物(3)	42
挿図34	遺構外出土遺物(4)	43
挿図35	S B01出土石器	44
挿図36	S B・S K・遺構外出土石器	45
挿図37	S D04出土石器	46
挿図38	遺構外出土石器(1)	47
挿図39	遺構外出土石器(2)	48

## 表 目 次

表1	土坑観察表	20
表2	遺構外出土縄文早期 前半土器観察表(1)	32
表3	“ (2)	33
表4	“ (3)	34

# 第I章 経 過

## 1. 調査に至るまでの経過

下伊那地方事務所土地改良課は、下伊那郡松川町と飯田市を結ぶ農道の新設を計画した。飯田市としては、座高自治区の埋蔵文化財包蔵地美女遺跡・半の木遺跡・座光寺城遺跡・座光寺中島遺跡・松林遺跡・南本城城址に影響が及ぶことが考えられた。そこで、平成6年9月29日に、長野県教育委員会文化課・下伊那地方事務所土地改良課・飯田市教育委員会社会教育課の三者による保護協議を実施した。その結果、各遺跡とも遺跡の状況が明らかでないので、試掘調査を実施して、本調査の可否を判断することとした。なお、試掘調査及び発掘調査の日程・費用については、事業の進捗状況を見極めながら、下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整をしていくことが確認された。

半の木遺跡の試掘調査は、平成7年12月11日から12月13日にかけて美女遺跡と共に実施した。その結果、両遺跡とも遺構・遺物が認められた。そこで、2遺跡ともほぼ路線全体を本調査の対象とし、協議を進めていくこととなった。

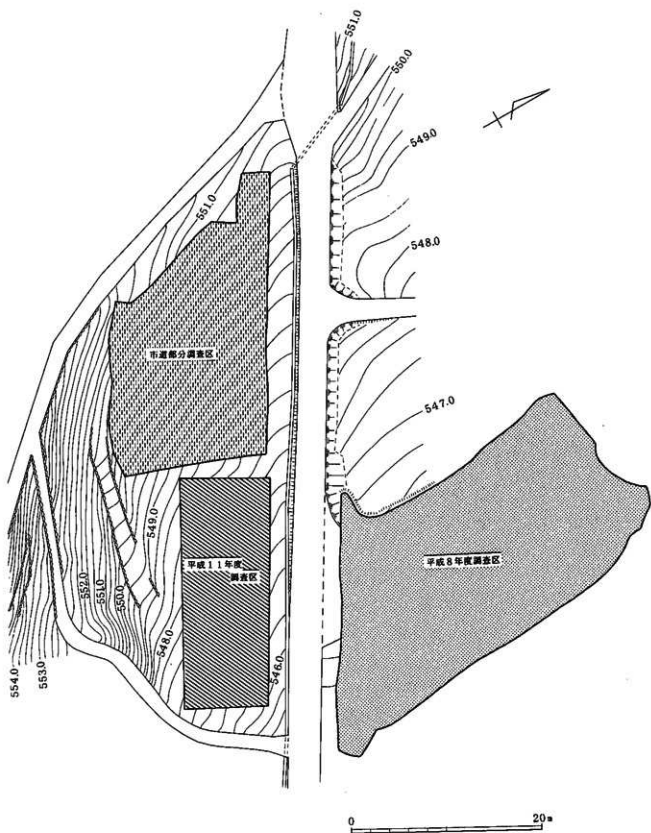
試掘が終了した平成8年1月から、本調査の時期と費用について下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整を進め、平成8年度に発掘調査、遺跡南部を横断する市道の南側については、平成9年度に試掘調査を実施し、本調査の可否を判断することとなった。これを受け、平成8年4月10日付で発掘調査、平成9年7月7日付で市道南側部分の試掘調査のそれぞれ委託契約書を取り交わした。市道南側部分の発掘調査と全体の整理作業については、平成11年度に実施することとなり、平成11年6月4日付で委託契約書を取り交わした。

## 2. 調査の経過（挿図1）

平成8年4月15・16日に重機を導入して調査区の拡張を実施し、4月16日には作業員を使って本調査を開始した。試掘調査で確認されていた竪穴住居址の他に土坑・集石炉などが検出され、順次掘り下げの調査を進めた。並行して写真撮影・図面整理を済ませ、5月31日には作業員を使っての作業が終了した。その後、図面作成作業を進め、5月31日には委託による測量作業をのぞいた全ての作業が終了した。作業が終了した6月2日には現地見学会を実施して、約80名の参加があった。その後、図面・写真などの基本的整理を実施して、平成8年9月30日に実績報告書を提出した。

平成9年度は、市道南側部分の試掘作業を実施した。平成9年9月28日に遺構・遺物などが僅かに確認され、本調査が必要と判断され、平成9年12月19日に試掘調査の実績報告書を提出した。

市道南側部分の発掘調査と整理作業は、委託契約書が締結できた平成11年7月9日より作業を開始した。7月26日に重機を使って調査区の拡張を実施し、順次遺構の掘り下げ調査を行い、並行して写真撮影・測量調査作業を済ませた。廃土処理の関係から、2回に分けた調査となり、8月10日には測量を含めた全ての作業が終了した。調査終了後、引き続き整理作業を実施した。飯田市考古資料館において、出土遺物の水洗・接合・復元作業、遺物実測・写真撮影作業、第2次原図の作成・トレース・版組などを行い、原稿を執筆して本発掘調査報告書を作成した。



挿図1 半の木遺跡調査範囲



### 3. 調査組織

#### ①調査

調査担当者	山下誠一（～平成10年度）			澁谷恵美子（平成11年～）			下平博行		
調査員	佐々木嘉和		吉川 豊（～平成10年度）			馬場保之			
	澁谷恵美子（平成11年度～）			吉川金利			福澤好晃		
	下平博行			伊藤尚志		坂井勇雄（平成11年度～）			
作業員	新井幸子	新井ゆり子	池田幸子	伊東祐子	井坪 節	井上恵資			
	今村勝次	今村春一	太田沢男	岡田直人	岡田紀子	金井照子			
	金子正子	金子祐子	唐沢古千代	北原 裕	木下早苗	木下玲子			
	久保田定男	熊谷義章	熊崎三代吉	小池千津子	小平不二子	小平峯子			
	小林千枝	斉藤 薫	斉藤徳子	神原政夫	佐々木真奈美	佐々木美千枝			
	佐々木文茂	佐藤知代子	清水三郎	代田和登	関島真由美	瀬古郁保			
	竹本常子	田中 薫	仲田昭平	鳴海紀彦	服部光男	原田四郎八			
	平栗陽子	樋本宣子	福沢育子	福沢幸子	福沢トシ子	古林登志子			
	古根素子	星本初子	正木実重子	牧内喜久子	牧内八代	松下成司			
	松下友彦	松下節子	松下光利	松島 保	松島直美	松本恭子			
	松村かつみ	三浦厚子	南井規子	宮内真理子	森藤美知子	柳沢謙二			
	吉川紀美子	吉沢佐紀子							

#### ②指導

長野県教育委員会

#### ③事務局

飯田市教育委員会社会教育課

（平成8年6月30日まで）

横田 穆（社会教育課長）

小林正春（ “ 文化係長）

吉川 豊（ “ 文化係）

山下誠一（ “ ” ）

馬場保之（ “ ” ）

吉川金利（ “ ” ）

福澤好晃（ “ ” ）

下平博行（ “ ” ）

伊藤尚志（ “ ” ）

岡田茂子（社会教育課社会教育係）

飯田市教育委員会博物館課

（平成8年7月1日から）

矢沢与平（博物館課課長 平成9年3月31日まで）

小畑伊之助（ “ 平成9年4月1日から）

小林正春（博物館課埋蔵文化財係長）

吉川 豊（埋蔵文化財係 平成11年3月31日まで）

山下誠一（ “ ” ）

馬場保之（ “ ” ）

吉川金利（ “ ” ）

福澤好晃（ “ ” ）

下平博行（ “ ” ）

伊藤尚志（ “ ” ）

坂井勇雄（ “ 平成11年4月1日から）

牧内 功（庶務係）

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 1. 自然環境（挿図2・3）

飯田市座光寺地区は市街地の北東約4kmにあり、北東を下伊那郡高森町、南東は天竜川を挟んで喬木村、南西を飯田市上郷と接しており、飯田市の北端部に位置している。

飯田市は赤石山脈と木曾山脈に挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られると共に山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い、盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

座光寺地区の場合、断層運動で作られた段丘で大きく上段（うわだん）と下段（しただん）に分けられる。上段は木曾山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水など微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川・栃ヶ洞川による扇状地の形成・開析谷の浸食は著しい。下段は数段の小段丘からなり、恒川遺跡群が立地する上位の段丘面の場合、北側は南大島川から扇状地が発達するのに対し、南側は比較的段丘面がよく残る複雑な微地形を呈する。

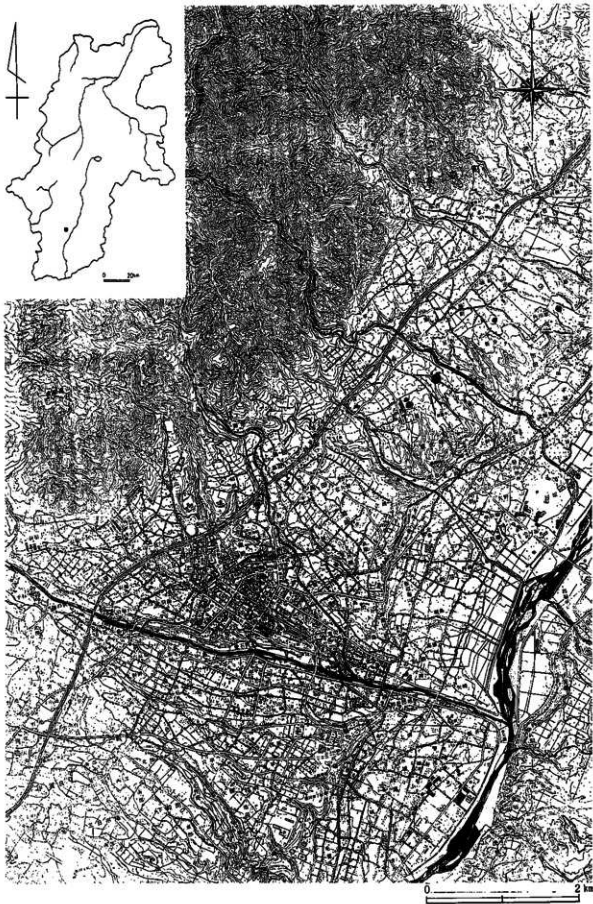
半の木遺跡は飯田市座光寺地区の北中央部に所在する。座光寺地区と高森町を画する南大島川が木曾山脈から流れ出しており、その開析谷は、浸食が著しく規模が大きい。その浸食谷は地区中央部では南大島川の現河床から2段をなしており、現河床の谷は幅が狭いのに反して、その上の面は比較的広い面を形成している。半の木遺跡はその面の南部に立地している。

微地形を見ると、北側は南大島川旧河床と考えられる窪地が北東から南東方向に続いており、そこに江戸時代と明治時代に築かれた「美女の堤」がある。その窪地を挟んだ北側には、1996年に調査が行われ、縄文時代早期の集落が確認された美女遺跡がある（飯田市教育委員会 1998）。南側は南大島川の浸食による比高差約20mを測る崖となっていて、崖上の段丘面には座光寺北の原遺跡・座光寺城遺跡がある。南東側は緩く傾斜しながら谷が続いており、古市場遺跡に接している。半の木遺跡の範囲で言えば、調査地点は西端部に当たる。

### 2. 歴史環境

座光寺地区は、土器石器などの遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に現れた先人達の活動の証左は、旧石器時代末まで溯る。前述の自然環境で概観した地形的特徴が、当遺跡の遺跡立地に大きく関わっており、上段・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。

上段は縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、特に山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍藏の調査で知られた大門原遺跡などがある。当面した傾斜地の扇状地扇中央部分にあたり、大規模な集落址の存在がうかがえる。平成8年度に農道改良に伴う発掘調査が実施され、縄文時代中期中葉から後葉の伊那谷有数の大集落が広がっていることが確認された。（飯田市教育委員会 1999）。扇端



挿図2 半の木遺跡位置図

から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の遺跡が分布する。高燥な台地に生産基盤を求めた該期に共通する現象であり、具体的には人口増加と生産手段の発達为背景と考えられる。昭和37年、前年の梅雨前線による集中豪雨の災害復旧工用採土のため、調査された弥生時代後期前半の座光寺原遺跡(今村 1967)、昭和50年農業構造改善事業に伴い道路部分が調査された弥生時代後期後半の中島遺跡(座光寺考古学研究会・下伊那誌編纂會 1991)など該期の典型的な集落があるといえる。中島遺跡は平成8年度に広域農道新設に先立ちその東側部分が発掘調査され、集落の広がりを把握することができた(飯田市教育委員会 1999)。段丘崖上部には北本城古墳を初めとする古墳及び中世の山城2つがある。後者は北本城と南本城であり、小河川に解析された複雑な地形を生かしている。

下段地帯は、縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代毎古地した地点を若干異にしている。縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地に立地する。縄文時代中期を除く他時期は、遺物のみの出土で集落の実体は明確でないが、資料が十分でない各期において比較的良好的な資料を提示している。縄文時代中期は、座光寺バイパス路線内の新屋敷遺跡でな集落の一部が調査されている(飯田市教育委員会 1986)。弥生時代中期から古墳時代前期にかけては弥生時代後期に一時的に拡大するものの、基本的に南大島川の扇状地に立地し、古墳時代後期から平安時代の集落は、扇状地および南側の段丘面に拡大する。一方、古墳の分布は該期集落の外縁の高岡1号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近および遺跡群東側の段丘崖上に見られる(飯田市教育委員会 1986)。これまでに調査された古墳は、新井原12号古墳・新井原古墳群・畔地1号古墳・高岡3号古墳・高岡4号古墳(飯田市教育委員会 1990)・ナギジリ1号古墳(飯田市教育委員会 1998)等があり、現在までに調査されずに消滅した古墳は数多くにのぼる。

昭和51年度から実施された一般国道座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果、大型掘立柱建物址群や硯・鉄鈴・和同開珎銀銭等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている(飯田市教育委員会 1986)。そして、昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で、古代「伊那郡衙」が追求されてきた。その結果、平成6年度の調査で、正倉となる大型の掘立柱建物址が調査され、なお郡衙の中心部は不明であるものの、具体的地点を上げて推定される段階に至った。同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。また、バイパス周辺の諸開発に伴う緊急調査の結果、田中・倉垣外地籍、新屋敷地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある。(飯田市教育委員会 1988・1991A・B)



押図3 半の木道跡周辺図

# 第三章 調査結果

## 1. 調査の方法と概要（挿図5）

試掘調査の成果を基に、工事用地内の遺跡調査範囲を決定した後、重機による表土剥ぎを行った。測量用の基準杭設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャステックに委託実施した。本調査区の区画はLC65 22-31・33-32・22-39・22-40に該当する（挿図5）。基準メッシュ図の区画については、『三尋石遺跡 三尋石（Ⅱ）遺跡』参考。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

### 平成8年度調査（挿図6）

- 竪穴住居址（S B）…………… 2軒
- 掘立柱建物址（S T）……… 1棟
- 土坑（S K）…………… 29基
- 集石炉（S I）…………… 5基
- 溝（S D）…………… 2条
- 穴・柱穴…………… 多数

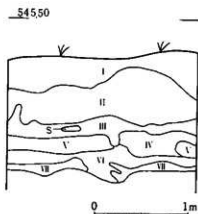
### 平成11年度調査（挿図7）

- 溝（S D）…………… 2条
- 穴・柱穴…………… 多数

## 2. 基本層序（挿図4）

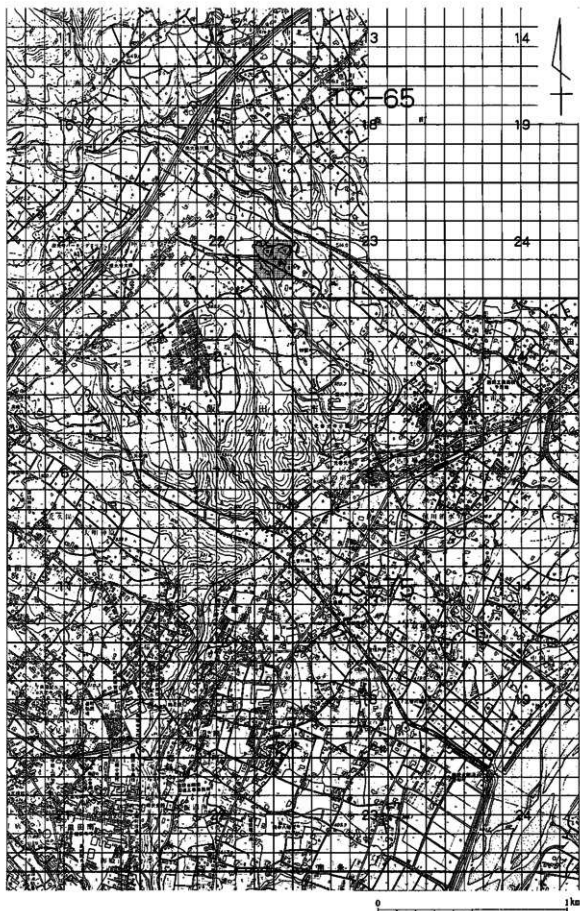
SK02の西側、用地外との南に面する壁面の層序を示した。

平成11年度調査地点はV層から調査を開始した。

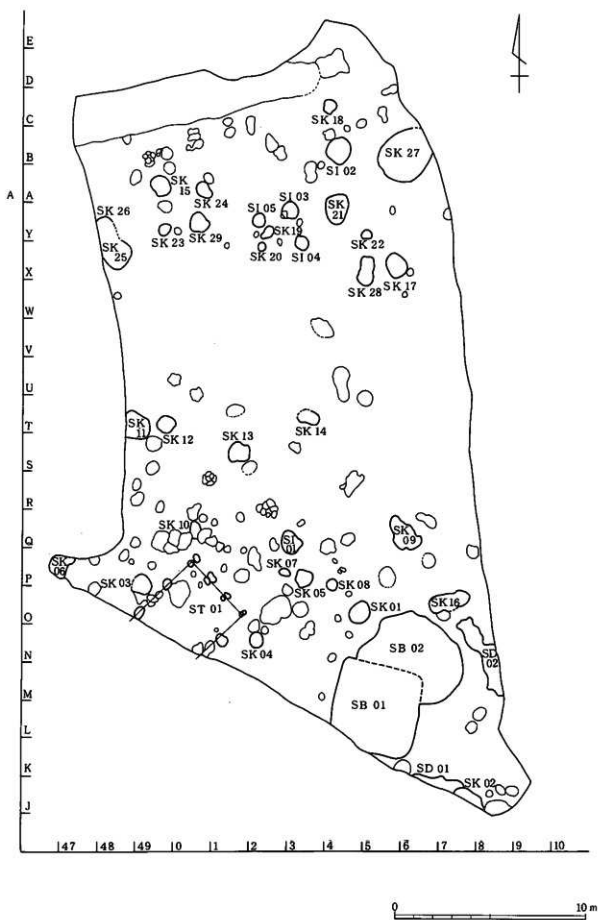


挿図4 基本層序

- I層：褐灰色土（10YR3/4 埴埴土・耕土）
- II層：暗褐色土（10YR3/3 埴埴土）
- III層：褐色土（10YR4/4 シルト質埴埴土）
- IV層：褐色土（10YR4/4シルト質埴埴土）と  
黒褐色土（10YR3/2シルト質埴埴土）が混じる
- V層：黒褐色土（10YR3/2 シルト質埴埴土）
- VI層：にぶい黄褐色土（10YR4/3シルト質埴埴土）遺構検出面
- VII層：黄褐色土（10YR5/6シルト質埴埴土）



押図5 基準メッシュ調査位置図



神図6 平成8年度調査区全体図



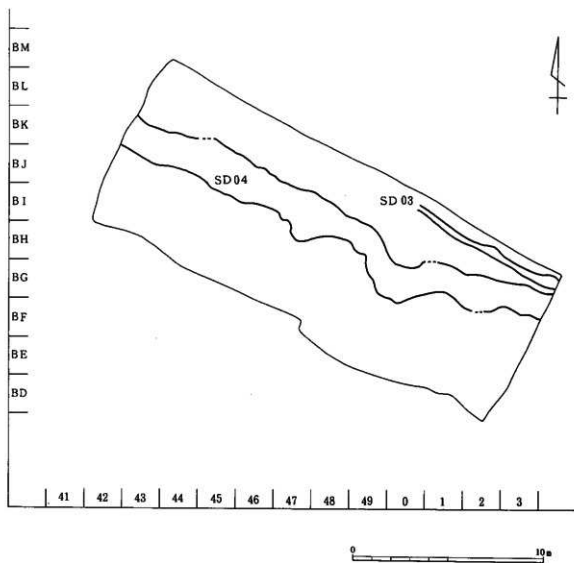
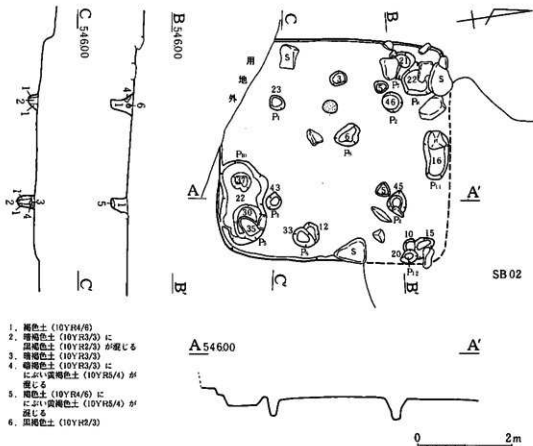


插图7 平成11年度調査区全体図

### 3. 遺構と遺物



柳園8 SB01

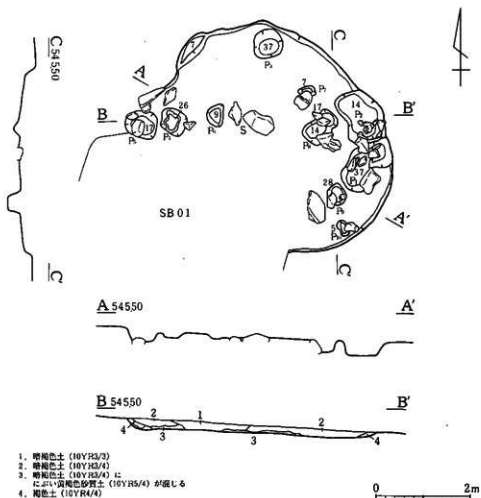
#### (1) 竪穴住居址

##### ① SB01 (柳園8)

BL5を中心に検出し、南西側が用地外となるため、わずかな部分が未調査となった。縄文時代のSB02を切る。5.9×4.9mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN84°Wを示す。壁高は8～25cmで、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に柔らかく不良であり、諸所に地山の礫が露出している。主柱穴はP1～4と推定され、P1・3からは柱痕が確認されている。また、P10は貼り床下から確認された。炉址は西側主柱穴中間に位置する地床炉で、床面を32×28cmの楕円形を呈し、僅かにくぼんで底面に若干の焼土が認められた。

遺物は南東隅から東壁中央部の壁際に床面からやや浮いた位置で多く出土した。他に、P8から勾玉が出土している。出土状態から一括性の高い良好な資料である。

出土遺物から古墳時代前期前半に位置づけられる。



挿図9 SB02

②SB02 (挿図9)

BM6グリットを中心に検出し、全体の3/4程度を調査した。古墳時代前期のSB01に切られる。長軸方向の長さが5.4mを測る楕円形の竪穴住居址で、長軸方向はN50°Wを示す。壁高は9～23cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は西壁付近の僅かな部分が堅緻で、全体に柔らかく不良である。主柱穴はP3・P4・P9で、SB01切り合い部分に存在すると思われる。炉址等は切り合いのため不明である。

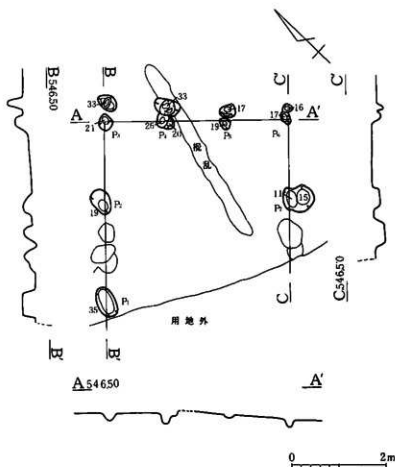
遺物の出土量は少なく、縄文早期～中期後半まで時期幅のある遺物が出土しているものの、主体となる土器は、隆帯間に梯子状沈線を施す梨久保b式である。

出土遺物から縄文時代中期中葉末に位置づけられる。

## (2) 掘立柱建物址

### ① ST 01 (挿図10)

B 0 1 を中心に検出され、一部調査区外南側に広がる。調査部分での柱間は桁行 2.5~1.8m 梁行 1.2m の長方形の建物址である。梁行の柱穴には一部重複してピットが存在し、建て替えが推定される。出土遺物はなく時期は不明である。



挿図10 ST01

## (3) 集石・集石炉

### ① S I 01 (挿図11)

B Q 3 で検出し、全体を調査した。

検出面では106×104cmの不整形を呈し、10cm以下の石が散在して確認された。断ち割り調査の観察では、底面に20~10cmの石15個が置かれ、その上に炭が大量に認められた。掘方の深さ37cmを測り、浅い逆台形の断面形をなす。

### ② S I 02 (挿図11)

B B 4 で検出し、全体を調査した。検出面では116×104cmの楕円形を呈し、10cm以下の石が散在して確認された。断ち割り調査の観察では、炭が底面まで見られた。掘り方は132×115cmの不整形楕円形を呈し、深さは43cmを測り、逆台形の断面形をなす。

遺物は縄文の帯状施文が見られるものがあり、縄文時代早期に位置づけられる。

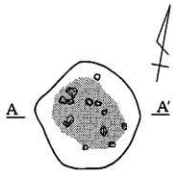
### ③ S I 03 (挿図12)

B Y 2・3 で検出し、全体を調査した。92×83cmの楕円形を呈し、12cm以下の石が散在して確認された。断ち割り調査の観察では、底面付近に炭が多く、石は上層で認められた。掘り方は深さ23cmを測り、浅い逆台形の断面形を呈す。集石中から無文土器片が出土したが、時期は不明である。

### ④ S I 04 (挿図12)

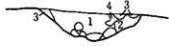
B X・B Y 3 で検出し、全体を調査した。82×72cmの不整形楕円形を呈し、12cm以下の石が散在して確認された。断ち割り調査の観察では、炭はあまり多くなく、石は上層で認められた。

SI 01

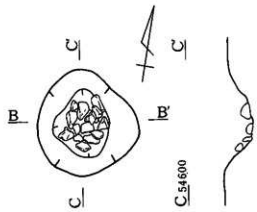


A54600

A'



1. 炭
2. 炭に褐色土 (10YR4/4) が覆じる
3. 褐色土 (10YR4/4) に炭がわずかに混じる
4. におい-灰褐色土 (10YR5/4) に炭が混じる



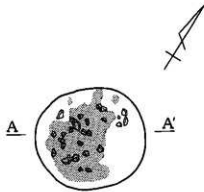
B54600

C54600



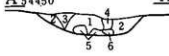
0 1m

SI 02

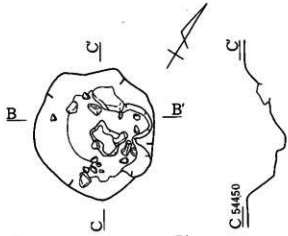


A54450

A'



1. 炭
2. 暗褐色土 (10YR3/4)
3. 暗褐色土 (10YR3/4) に炭がわずかに混じる
4. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
5. 灰黄褐色土 (10YR4/2) に炭がわずかに混じる
6. におい-灰褐色土 (10YR4/3)



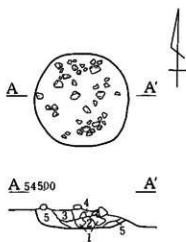
B54450

C54450

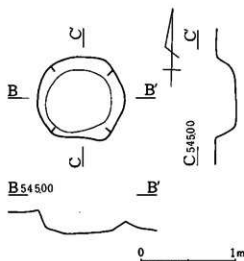


0 1m

挿図11 SI 01・02



SI 03



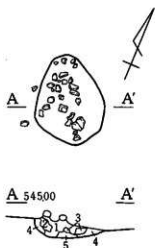
A 54500

A'



1. 炭に暗褐色土 (10YR3/3) が覆じる
2. 暗褐色土 (10YR3/3) に炭が覆じる
3. 暗褐色土 (10YR3/3)
4. 黒灰色土 (10YR3/2) にわずかに炭が覆じる
5. 暗褐色土 (10YR3/4)

SI 04



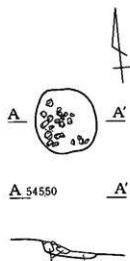
A 54500

A'



1. 黒褐色土 (10YR3/2)
2. 黒褐色土 (10YR3/2) に炭が覆じる
3. 黒褐色土 (10YR3/2) に褐色土 (10YR4A) が覆じる
4. 暗褐色土 (10YR3/4)
5. 暗褐色土 (10YR3/3)

SI 05



A 54550

A'



1. 黒褐色土 (10YR3/2)
2. 暗褐色土 (10YR3/3)

挿図12 SI 03~05

⑤ S I 05 (挿図12)

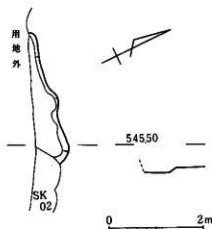
B Y 3 で検出し、全体を調査した。65×60cmの不整形円形を呈し、10cm以下の石が遺構全体に散在して確認された。断ち割り調査の観察では、石は上層のみで認められ、炭化物等の混入物は見られなかった。掘り方の深さは19cmを測り、浅い逆台形の断面形を呈す。遺構底面においても炭・焼土等は確認できず、集石炉としたS I 01～04とは若干形態が異なっている。こうした点から、集石炉として判断せず、集石として捉えている。

遺構内から器面全体に大粒の楕円文の施文された押型文土器が1点出土しており、縄文時代早期前半と考えられる。

(4) 溝址

① S D 01 (挿図13)

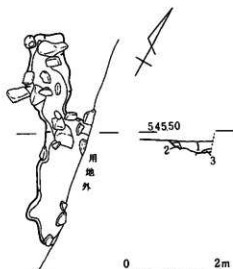
B J 6～B T 7 で検出し、古墳時代前期のSK 0 2 に切られる調査区内の全長は2.8mで、深さ11～7cmを測る。幅は南側が用地外で確認できなかった。



挿図13 SD01

② S D 02 (挿図14)

B O 7～B M 8 で検出し、東側用地外に連続する。調査区内の全長は4.4mで、幅100cm・深さ39～7cmをはかる。土層は暗褐色土が主体で、断面形は逆台形をなす。底面に見られる礫は地山に含まれるものである。



挿図14 SD02

③ S D 03 (挿図15)

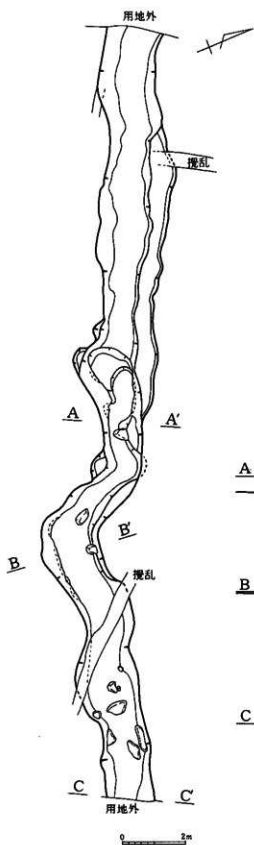
平成11年度調査で確認された。B H 1 を中心に確認し、用地外東側に連続する。調査区内での全長は8.8mで、幅36cm・深さ10cmを測る。埋土は褐色土のみで、断面形は逆台形となる。遺物等の出土は見られず、時期は不明である。

④ S D 04 (挿図15)

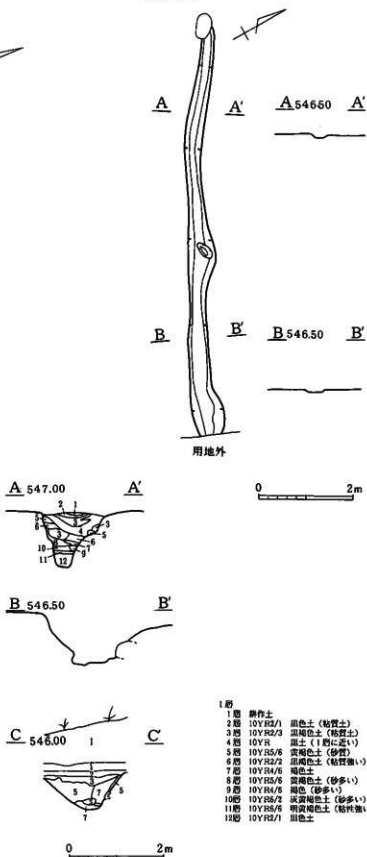
平成11年度調査で確認された。調査区を東西に縦断して確認され、西側の市道調査部分でも検出された。全長24m・深さ約1.2mを測る。断面形は西側で逆台形となり、ほぼ中央部で逆凸字状を呈す。中央部でのセクションの観察から、砂が間層を挟み2層以上堆積している状況が確認でき、長期にわたる存続が推定できた。遺物は3層より中世の陶磁器類、6層から土師器、7層以下には縄文土器・石器がローリングを受けた状態で出土した。底面には多数のピット状の落ち込みがあり部分的に鉄分の集積層が認められた。以上から自然流路と判断される。

1. 暗褐色土 (10YR2/3)
2. 暗褐色土 (10YR2/3) に  
こよい黄褐色砂質土 (10YR5/4) が混じる
3. 褐色土 (10YR4/4)

SD 04



SD 03



- 1層 耕作土
- 2層 10Y R2/1 棕色土 (粘質土)
- 3層 10Y R2/2 深棕色土 (粘質土)
- 4層 10Y R 深土 (1層に乏い)
- 5層 10Y R5/5 黄褐色土 (砂質)
- 6層 10Y R2/2 深褐色土 (粘質強い)
- 7層 10Y R4/6 褐色土
- 8層 10Y R5/6 黄褐色土 (砂多い)
- 9層 10Y R4/5 褐色 (砂多い)
- 10層 10Y R5/5 淡黄褐色土 (砂多い)
- 11層 10Y R5/5 明黄褐色土 (粘質強い)
- 12層 10Y R2/1 棕色土

挿図15 SD03・04



(5) 土坑 (挿図16～19)

本調査区からは平成8・11年度を通じ合計29基の土坑が確認されており、これらの多くから遺物が確認されている。時期別に見てみると、縄文時代早期前半5基・早期後半7基・中期2基・古墳時代1基・時期不明16基となる。ここでは特異な土坑のみ記載を行い、その他は土坑の形態・遺物の出土状況・分布状況について全体にわたる観察を示す。また、各土坑の個別データは一覧表で示す。

①土坑の形態分類および時期比定について

土坑の平面形態は、短径と長径がほぼ同一のものについて円形として、径の比が明らかなものについては楕円形とし、その他を不整形として分類している。また、断面形では逆台形のものが多いを占め、船底状のものも少数見られる。埋土の状況は、埋土中に礫が混入するもの (SK02・11・15・21・27) もみられる。

土坑の時期決定については、器形復元が可能な土器・埋設土器・土坑内の遺物が同時期になる場合についてはその遺物の時期とした。また、各時期にわたる遺物が混在する場合、及び遺物が小破片で時期不明な場合土坑の時期比定は行っていない。

②土坑の分布状況

土坑の時期別分布状況を見ると、縄文時代早期前半の土坑は、平成8年度調査区南側に偏る傾向が見られ、その他の時期は調査区に散漫に分布し、集中する箇所は見られない。ところで、縄文時代早期前半のグリット出土の遺物は、8年度調査区北東隅に密集し、当該期の土坑がまとまる南側では、出土量が極めて少ない傾向にある。こうした点から、何らかの区別がなされている可能性も指摘できよう。

いずれにしても、今次調査範囲内では集落内での土坑の位置関係が明確にできなかった。

③土器埋納土坑 SK13 (挿図17)

B S 1で検出し、全体を調査した。長径112cm・短径104cm・深さ38cmを測る不整形な土坑である。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。遺物は土坑西側壁寄りから底面より浮いた状態で、縄文時代早期条痕文系土器がほぼ1個体横倒しに出土した。遺物は底部が故意に穿孔されており、口縁部付近に2箇所補修孔が見られる。

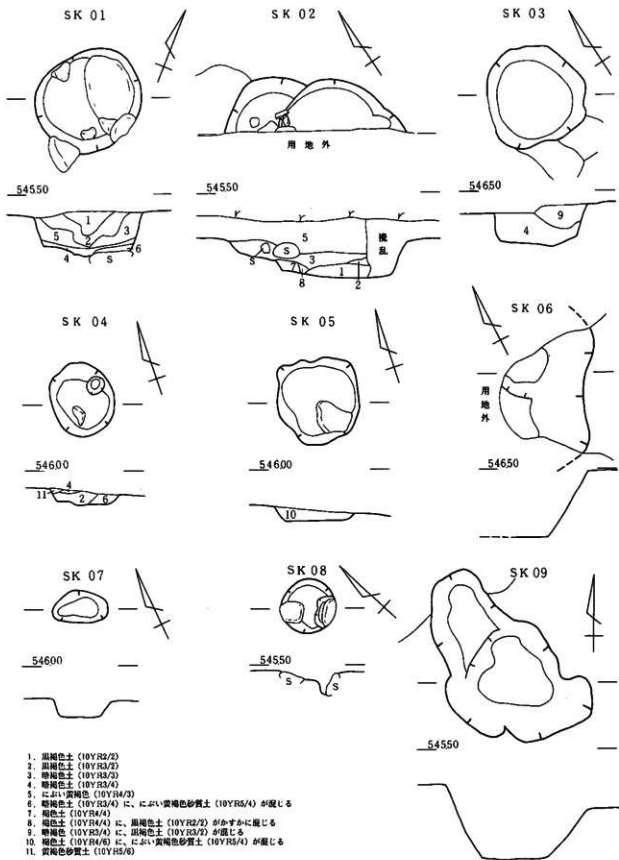
出土状態から土坑に埋納された土器と推定される。

(6) 周辺ピット (挿図20～25)

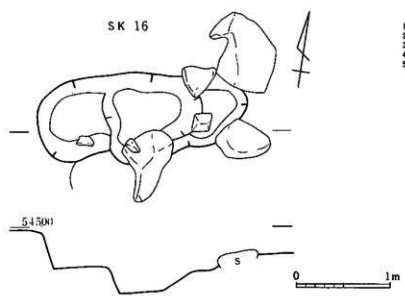
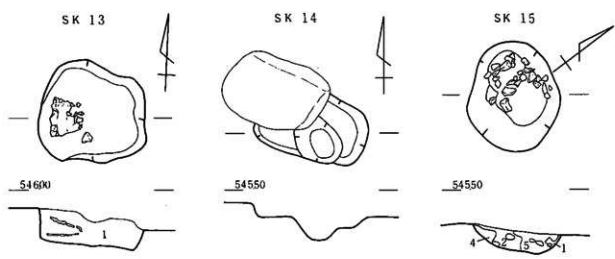
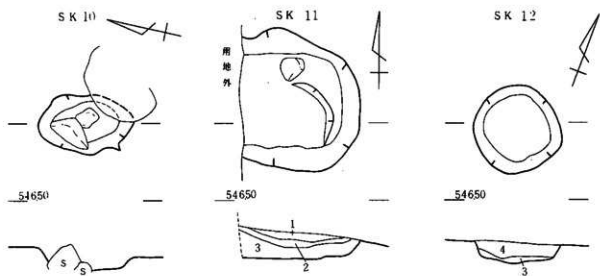
平成8年度及び11年度調査区全体で検出している。特定の集中箇所も認められず、規則性もない。規模は160cm～30cm程度であり、形状は円形・楕円形・不整形と様々である。出土遺物はなく、人為的なものではないと考えられる。

表1 土坑觀察表

No	挿図	検出位置	規模(長×短×深)cm	平面形	時代・時期	出土遺物	備考
1	16	B O 4	112×108×48	楕円形		条痕文系土器・中期土器	
2	16	B J 7	192×56×35	不整形	古墳	土師器 甕	
3	16	B P 49	104×100×41	不整形			
4	16	B N 2	80×68×11	楕円形	縄文中期	縄文中期土器	
5	16	B P 3	92×88×9	不整形	縄文早期	縄文土器(早期)	
6	16	B P 47	(88)×(-)×72	不整形			
7	16	B P 2	60×32×19	楕円形			
8	16	B P 4	56×56×24	円形		縄文早期～後期土器	
9	16	B Q 6	208×120×75	不整形	縄文早期	条痕文系土器(早期)	
10	17	B Q 0	100×60×24	不整形	縄文早期	押型文土器	
11	17	B T 49	144×(-)×30	不整形	縄文早期	縄文土器(早期)	
12	17	B T 49	92×92×26	円形	縄文早期	条痕文系土器・石器	
13	17	B S 1	112×104×38	不整形	縄文早期	条痕文系土器(早期)	土器埋設
14	17	B T 3	120×68×39	不整形			
15	17	A A 49	112×96×30	不整形			
16	17	B O 7	220×96×65	不整形	縄文中期	無文土器	
17	18	B X 5	124×108×42	楕円形	縄文早期	条痕文系土器	
18	18	A C 4	76×68×22	不整形	縄文早期	押型文土器	
19	18	B Y 2	32×(-)×82	不整形			
20	18	B X 2	44×36×27	楕円形	縄文中期	縄文中期土器	
21	18	B Y 4	160×120×32	不整形	縄文早期	条痕文系土器(早期)	
22	18	B Y 5	56×48×20	楕円形	縄文早期	押型文土器	
23	18	B Y 49	68×60×23	楕円形			
24	18	A A 0	88×84×36	不整形			
25	19	B X 48	156×144×43	不整形			
26	19	B Y 48	(-)×(-)×31	不整形			
27	19	A B 6	(-)×252×33	不整形		石器	
28	19	B X 5	156×72×30	不整形	縄文早期	条痕文系土器(早期)	
29	19	B Y 0	104×100×42	不整形	縄文早期	条痕文系土器(早期)	

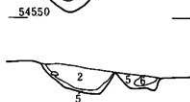
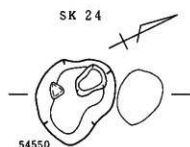
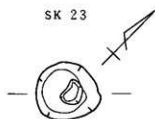
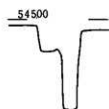
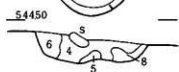
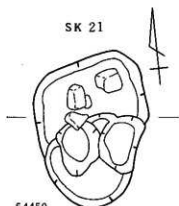
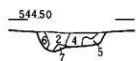
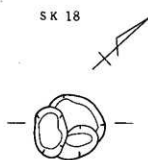
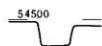
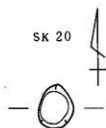
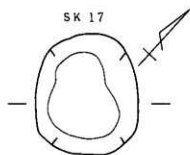


押図16 SK01~09



1. 褐色土 (10YR4/4)
2. 暗褐色土 (10YR3/3)
3. におい黄褐色土 (10YR4/3)
4. 暗褐色土 (10YR3/4)
5. 黒褐色土 (10YR3/4)

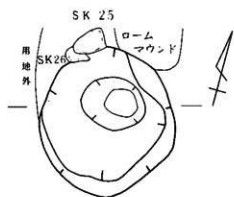
挿図17 SK10~16



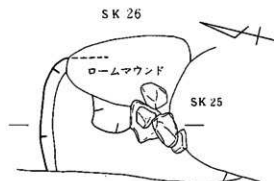
1. 黒褐色土 (10YR2/3)
2. 灰褐色土 (10YR2/2)
3. 暗褐色土 (10YR2/2)
4. 暗褐色土 (10YR2/3)
5. 褐色土 (10YR4/4)
6. 暗褐色土 (10YR2/4)
7. にがい黄褐色土 (10YR2/4)
8. 褐色土 (10YR4/6)



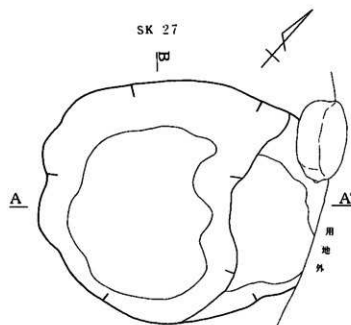
挿図18 SK17~24



54600



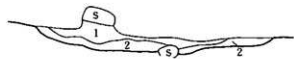
54600



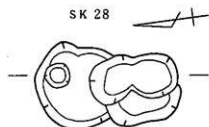
A 544450



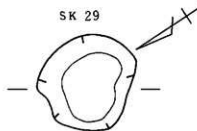
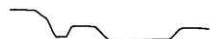
B 54450



0 1m



54500

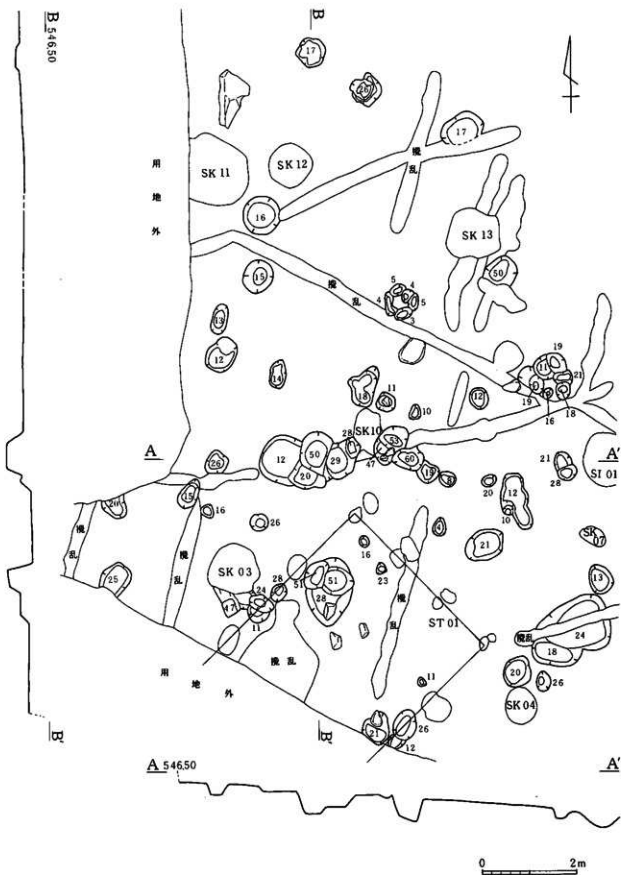


54550

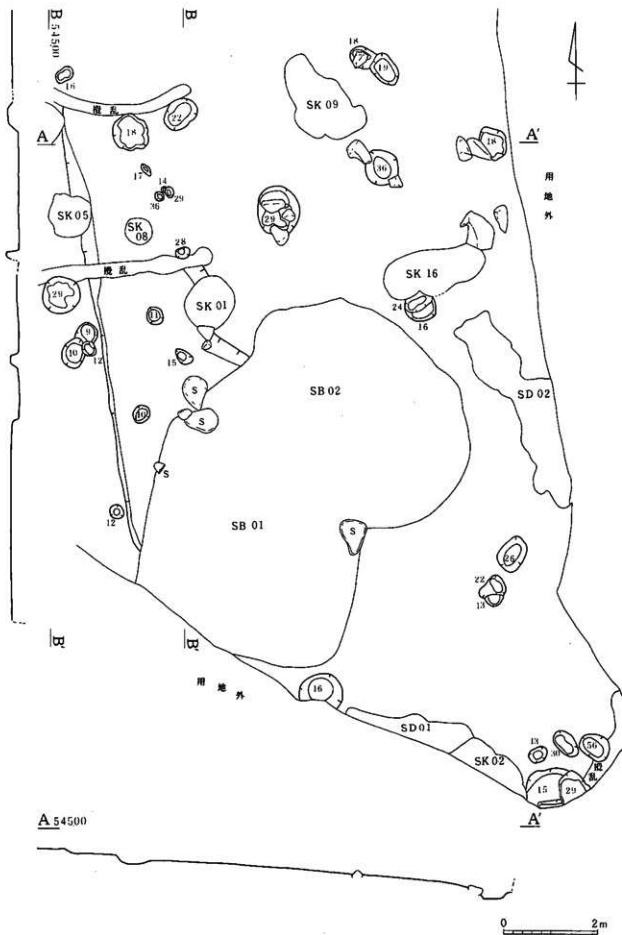


1. 暗褐色土 (10YR3/4)
2. 棕色土 (10YR4/4)
3. 濃い黄褐色土 (10YR4/3)
4. 暗褐色土 (10YR3/4) に  
棕色土 (10YR4/4) が混じる

挿図19 SK25~29

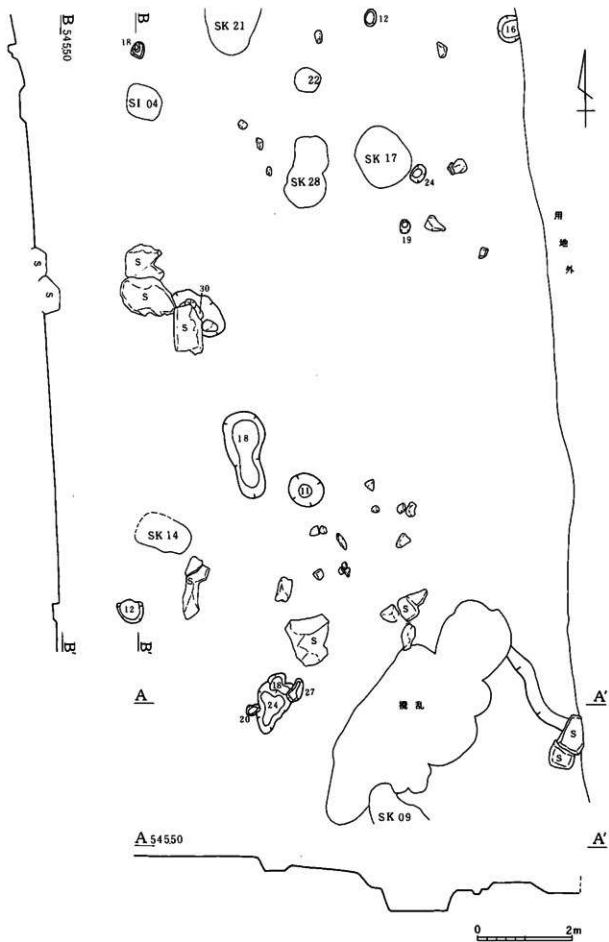


挿図20 平成8年度調査区周辺ピット図(1)

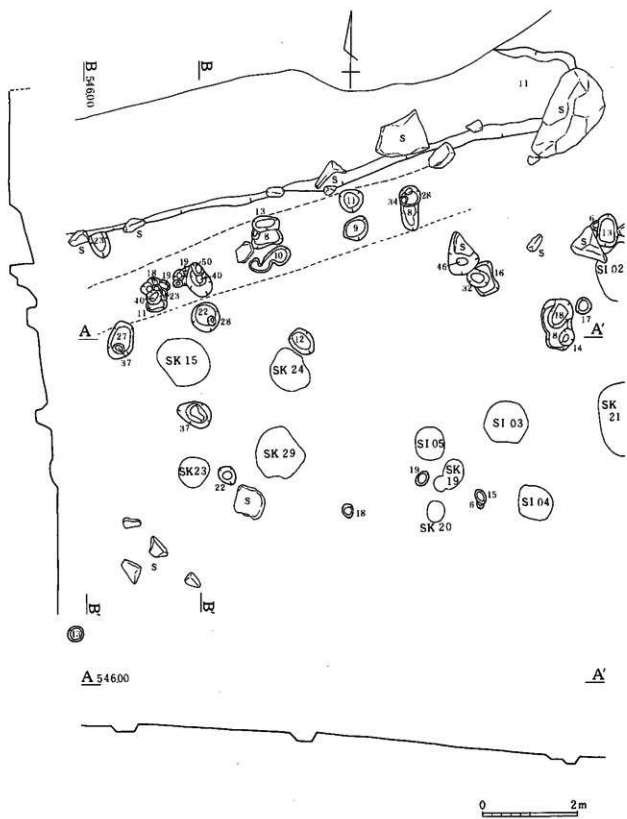


挿図21 平成8年度調査区周辺ピット図(2)

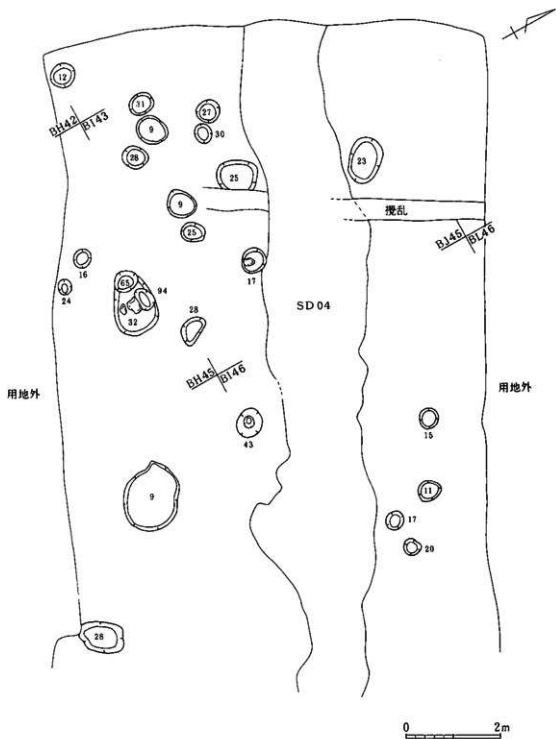




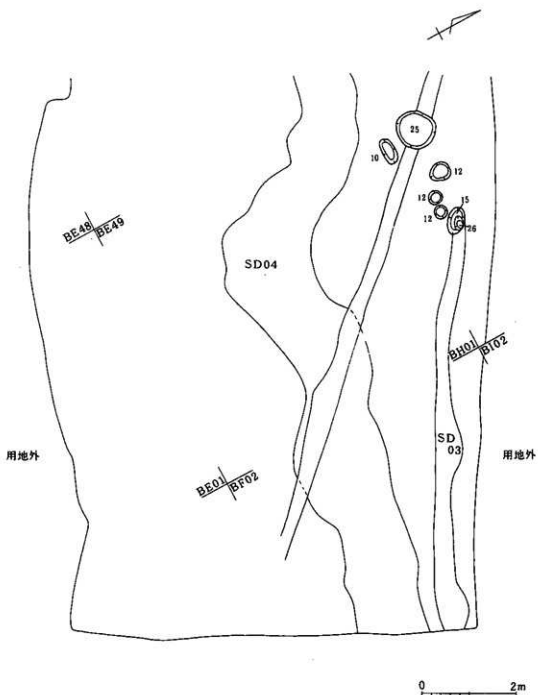
押図22 平成8年度調査区周辺ピット図(3)



挿図23 平成8年度調査区周辺ピット図(4)



柿図24 平成11年度調査区周辺ピット図(1)



補図25 平成11年度調査区周辺ピット図(2)

## (7) 遺構外出土遺物 (挿図31)

平成8・11年度調査区を通じ、遺構外から遺物が出土している。このうち、平成11年度調査箇所では、縄文～古墳時代にわたる土器が出土しているものの、出土量は僅かで、細片が多いため図示していない。一方、平成8年度調査区からは押型文土器を主体に早期前半の良好な資料が出土している。ここでは、押型文土器を含む早期前半の土器群についてはその出土状況等を主とし、その他の遺物についても記載する。

### ①押型文土器の出土状況

図示した遺構外出土の押型文土器および当該期の土器群は総点数88点、内出土グリット及び層位が確認できたものは78点である。それ以外の遺物は、攪乱あるいは重機荒土一括などから見いだされたものである。

押型文土器 (挿図) の多くは押型文もしくは縄文の帯状施文が特徴である「樋沢式」で、黒鉛を多量に含む胎土を持つ「沢式」および撚糸文土器も存在する。また、「立野式」および繊維を含む押型文土器も極少数出土している。樋沢式・沢式・撚糸文土器はA B 5、6・A A 5、6・B Y 5、6の6つのグリットに全体の8割程度が集中しており、立野式はこれらと分布を重複することなく周辺のグリットで散漫に出土している。一方、樋沢式・沢式・撚糸文土器の出土層位は、II層の暗褐色土から樋沢17点、沢1点、縄文・撚糸8点、III・IV層の褐色土から樋沢11点、沢1点、縄文・撚糸16点、V層の黒褐色土から樋沢10点、縄文・撚糸11点とII層からV層にかけて満遍なく出土している。こうした点から集中出土地区に何らかの遺構が存在した可能性も指摘される。また、明確な層位的な分離はできなかったものの、立野式と樋沢式が重複せずに出土したことが明確になった。

### ②その他の遺物

押型文土器以外にもグリットから各時期にわたる遺物が出土している。挿図33-1～11は、表裏に貝殻あるいは捺痕状の条痕文が見られ、胎土に繊維を多量に含む土器である。1・6・7・9には器面に刺突文が施された土器で、東海地方の粕畑式に比定される。12～16・19は、胎土に繊維を含み、器面に縄文が施される土器群である。このうち19は頸部付近の破片で、有段部が認められ、茅山下層式と並行する土器群と考えられる。17・18は胎土に繊維を含み、器面に細い竹管状の工具で格子状の文様を施した土器群である。茅野市判ノ木山西遺跡等で類例がみられる。20は胎土に繊維を含み、内外面に条痕文が施された条痕文系土器群の底部である。21～31は器面に縄文が施される一群で、繊維は含まず薄く堅緻な土器が多い。胎土などの点で縄文前期末葉から中期初頭に比定される。34・35は堅緻な無文土器である。胎土に雲母を含み、押型文土器と同様な胎土をしている。挿図34-10～12は中期後葉の土器で、S B 02と同様な時期と推定される。4～6は沈線文を主体に渦巻文様のモチーフも見られる後期前葉の土器。7～11は器面に条痕文の施される土器群で、晩期終末に位置づけられる。20・21は、弥生時代後期の壘の底部である。12～19は無文の土器群で、詳細は不明である。

表2 遺構外出土縄文早期前半土器観察表(1)

挿図No	位置	層	原 体	施文の特徴など	胎 土	厚さ
31-3	B V 4	II	格子目文		白色粒子多量に含む	8 mm
4	A B 5	V	山形文 2条 2単位	横位帯状・口唇施文	細かい雲母片多い	4 mm
5	B Y 5	V	山形文 2条 3単位	横位帯状・口唇施文	細かい長石粒	4 mm
6	A B 6	V	山形文 2条 2単位	横位帯状・口唇施文	白色粒(長石)多い	4.5mm
7	A B 5	II	山形文? 2条 2単位	横位帯状・口唇施文	砂粒多い	5 mm
8	A B 5	III・IV	山形文? 2条 2単位	横位帯状・口唇施文	長石粒(径2mm)多い	4.5mm
9	B Y 5	II	山形文	横位帯状・口唇施文	長石粒多い	6 mm
10	遺構外		山形文 3条? 単位	縦位帯状	長石粒多い	5 mm
11	遺構外		山形文 2条 2単位	口唇施文	雲母・白色粒多い	6 mm
12	B Y 6	V	山形文 2条? 単位	口唇施文	長石粒多い	4 mm
13	B Y 5	II		原体端部のみ	雲母片多い	4 mm
14	A B 6	II	山形文 3条 2単位	横位帯状・口唇施文	黒鉛	4 mm
15	A B 5	III・IV	山形文 3条? 単位	縦位帯状	長石粒(2mm)多い	4 mm
16	A A 6	V	山形文	縦位帯状	雲母片多い	4 mm
17	B Y 5	II	山形文 3条 2単位	縦位帯状	長石・雲母片多い	6 mm
18	B Y 0	III・IV	山形文	縦位帯状?	長石粒多い	5 mm
19	B Y 5	II	山形文? 2条 2単位	縦位帯状	長石粒多量に含む	5 mm
20	A B 6	V	山形文	縦位帯状	長石粒多い	4 mm
21	B Y 6	V	山形文	縦位帯状?	長石粒多い	
22	B Y 5	II	山形文	縦位帯状?	雲母片多い	4 mm
23	B Y 5	II	山形文	縦位帯状?	雲母片多い	5 mm
24	A A 6	V	山形文	縦位帯状	雲母片多い	4 mm
25	A P 5	V	山形文	縦位帯状?	長石粒多い	6 mm
26	A A 5	III・IV	山形文	縦位帯状	長石粒多い	4.5mm
27	B V 5	V	山形文		長石粒多い	4 mm
28	B A 2	III・IV	山形文	縦位帯状		4 mm
29	A A 5	II	山形文		雲母片多い	5 mm
30	A A 6	III・IV	燃糸文L		長石粒多い	4 mm
31	A A 5	III・IV	山形文		白色粒子多い	4 mm
32	B W 6	III・IV	山形文 3条? 単位	縦位帯状	白色粒子多い	4.5mm
33	A A 5	III・IV	山形文		雲母片多い	4 mm
34	B Y 5	II	山形文	横位帯状	雲母片多い	6 mm
35	B Y 5	II	山形文	横位帯状	長石粒多い	5 mm
36	A A 5	II	山形文	横位帯状	白色粒多い	5 mm
37	A A 5	II	山形文		白色粒多い	6 mm

表3 遺構外出土縄文早期前半土器観察表(2)

押図No	位置	層	原 体	施文の特徴など	胎 土	厚さ
31-38	BY49	Ⅲ・Ⅳ	山形文		雲母片多い	6mm
39	BY5	Ⅱ	山形文		白色粒多い	4mm
40	AA5	Ⅲ・Ⅳ	山形文		白色粒多い	4mm
41	AB6	Ⅲ・Ⅳ	山形文6条?単位	横位帯状	黒鉛・白色粒	4.5mm
42	BY4	Ⅱ	山形文2条2単位		雲母片多量	6mm
43	一括		格子目文		長石粒多い	5mm
44	一括		山形文?	口唇部山形文施文	長石・石英粒多量	7mm
45	AA5	Ⅱ	格子目文	縦位帯状	雲母・石英・長石多量	5mm
46	BX49	Ⅲ・Ⅳ	格子目文	縦位帯状	長石・雲母多量	6mm
47	BX4	Ⅲ・Ⅳ	山形文		長石・白色粒子多い	9mm
48	BW6	Ⅲ・Ⅳ	山形文		長石・白色粒子多い	6mm
49	一括		山形文	密接施文	長石・石英粒多量	8mm
50	AA5	Ⅱ	山形文		雲母片多い	6mm
51	攪乱		山形文(縦位刻み)	密接施文	長石・石英粒多量	8mm
52	BY6	V	楕円文・山形文		繊維	
53	一括		楕円文		繊維	6mm
32-1	BY6	V	縄文LR(内外面)	口縁部内面・口唇部施文。接合面に縄文あり	雲母片・長石粒多い	6mm
2	AB6	Ⅲ・Ⅳ	縄文RL(内外面)	口縁部内面施文	長石・雲母少量	5mm
3	AB6	Ⅲ・Ⅳ	縄文LR(内外面)	口縁部内面・口唇部施文	雲母・長石粒多量	5mm
4			縄文LR	口唇部施文?	長石多量	5mm
5	一括		縄文LRL		雲母・長石粒多量	5mm
6	BX3	Ⅲ・Ⅳ	縄文	口唇部施文	長石多量	6mm
7	AB6	Ⅱ	縄文RL	口唇部施文(同一原体)	長石多量	5mm
8	BX3	Ⅲ・Ⅳ	縄文		長石多量	5mm
9	AB6	Ⅱ	縄文LR	口唇部施文(同一原体)	白色粒多量	
10	BX5	V	縄文LR(内外面)	内面施文	長石・石英粒多量	6mm
11	AB5	Ⅲ・Ⅳ	縄文(内外面)	内面施文		4mm
12	AB6	Ⅱ	縄文LR	内面指頭痕あり	雲母・長石粒多量	5mm
13	AA6	V	縄文RL		長石多量	5mm
14	BY4	Ⅲ・Ⅳ	縄文RL		雲母・長石粒多量	4mm
15	AA6	Ⅱ	縄文		白色粒少量・軽しよう	4mm
16	AB6	Ⅱ	縄文LR		白色粒少量	5mm
17	BY5	Ⅱ	縄文		長石・石英多い	6mm
18	AB6	V	縄文RL?		雲母片多量	6mm

表4 遺構外出土縄文早期前半土器観察表(3)

挿図No	位置	層	原 体	施文の特徴など	胎 土	厚さ
32-19	AA 5	V	縄文RL		長石粒多い	5mm
20	AA 6	V	縄文		雲母・長石多い	5mm
21	AA 5	Ⅲ・Ⅳ	縄文?		長石粒多い	4mm
22	AB 6	Ⅲ・Ⅳ	縄文		雲母・長石多い	5mm
23	AB 5	V	縄文		雲母・長石多い	3mm
24	AB 5	V	縄文RL		石英多い	5mm
25	AA 7	Ⅱ	縄文LR		石英・雲母	5mm
26	AA 5	Ⅲ・Ⅳ	撚糸文L		雲母・白色粒子多い	5mm
27	AA 49	Ⅱ	撚糸文R		雲母・長石多い	7mm
28	AB 5	Ⅲ・Ⅳ	撚糸文R		石英粒多量	
29	BY 4	Ⅱ	縄文RL		石英粒少量	4mm
30	AA 6	V	縄文	内面指頭痕あり	雲母片多い	5mm
31	不明		撚糸文?		白色粒子多い	4mm
32	AB 6	V	撚糸文L		白色粒多量・雲母片少量	4mm
33	AA 5	V	撚糸文R		雲母片少量	4mm
34	AB 5	Ⅲ・Ⅳ	撚糸文R		雲母片少量	4mm
35	AA 5	Ⅲ・Ⅳ	撚糸文L	縦位帯状施文	長石少量	5mm
36	AB 6	Ⅲ・Ⅳ	撚糸文R	縦位帯状施文	長石少量	5mm
38	AB 6	Ⅲ・Ⅳ	縄文		長石・白色粒多量	5mm
34-1	AA 5	Ⅲ・Ⅳ	撚糸文?	口唇部施文原体不明	白色粒子・雲母片	5mm
2	AA 6	V	撚糸文?	口唇部施文原体不明	白色粒子・長石・雲母片	5mm
3	AA 5	Ⅲ・Ⅳ	無文?		雲母片多量	5mm
4	AB 5	V	無文?		長石・雲母片多量	6mm
5	BY 6	Ⅱ	無文		長石・雲母片多量	6mm
6	AB 5	Ⅱ	無文		長石・雲母片多量	7mm
7	AA 5	Ⅱ	無文		長石・白色粒多量	5mm
8	BY 5	Ⅱ	無文		雲母片多量	4mm
9	AA 5	Ⅱ	無文		雲母片多量	6mm



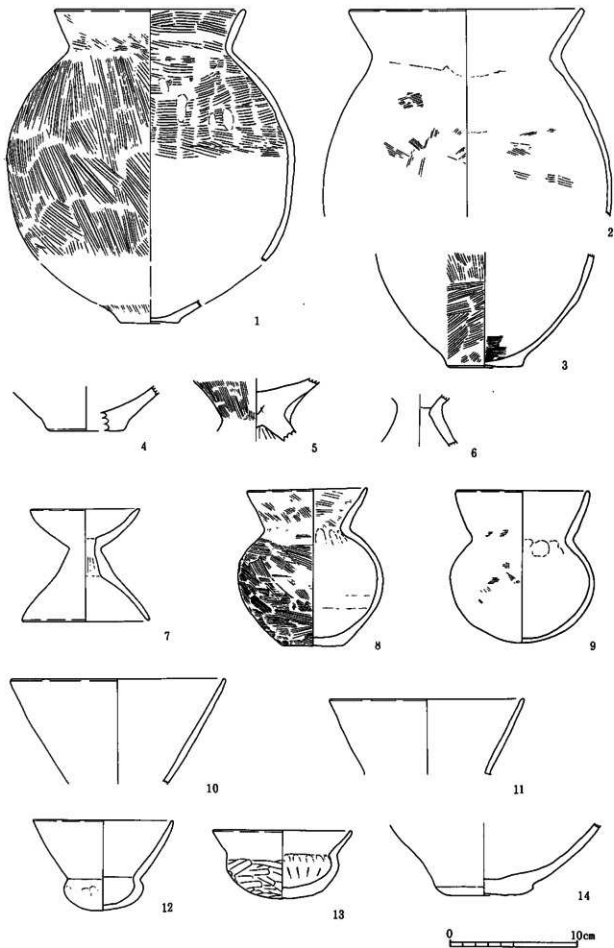


插图26 SB01 出土土器

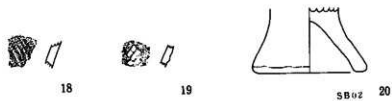
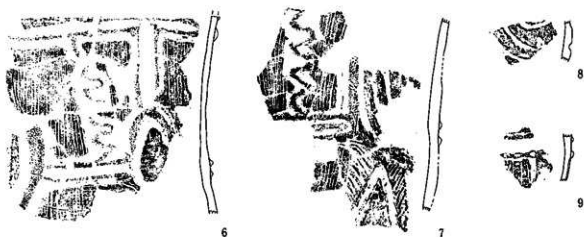
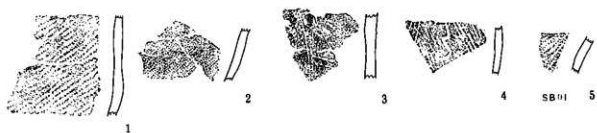
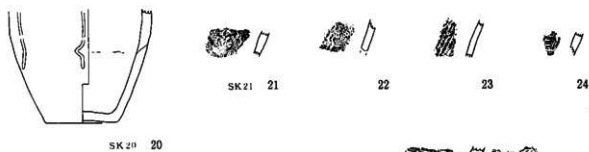
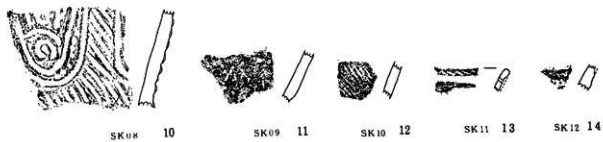
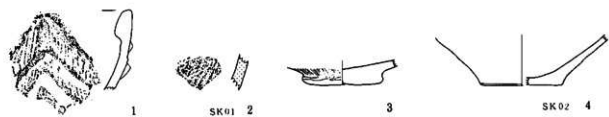
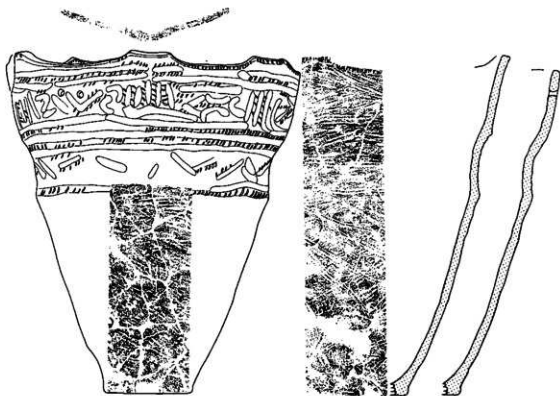


插图27 SB01·02 出土土器

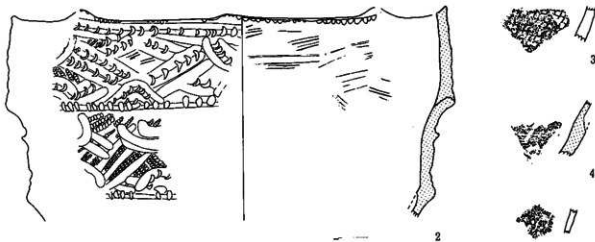


柳園28 SK01~29 出土土器



SK 13 1

0 10cm



SK 28 5



S102 6



7



S103 8



S105 9

0 10cm

插图29 SK13·28 S102~05 出土土器

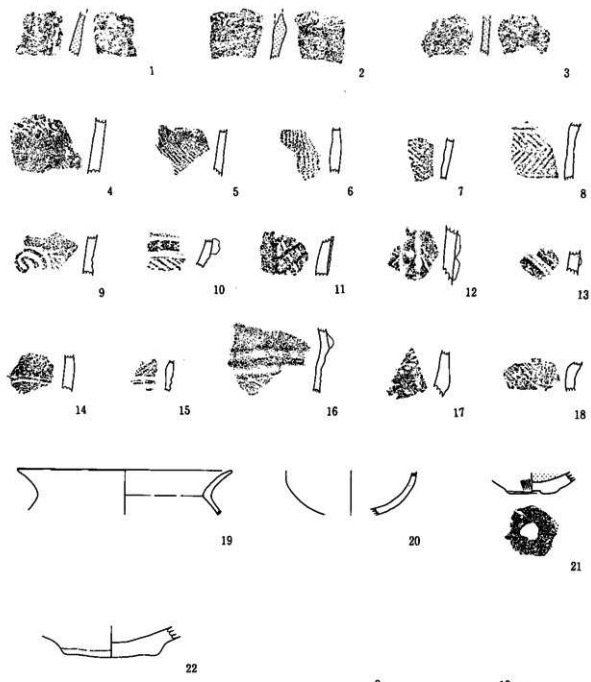
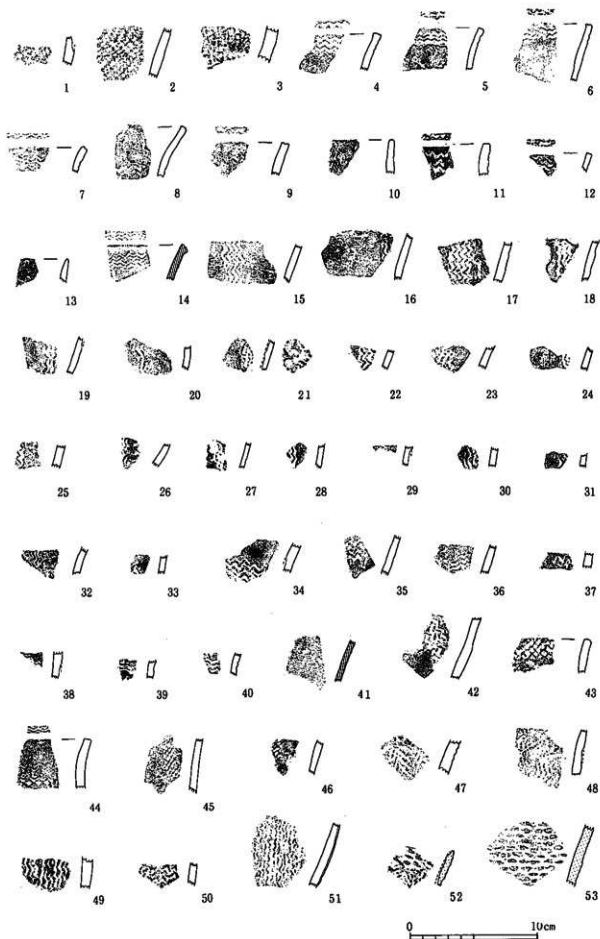
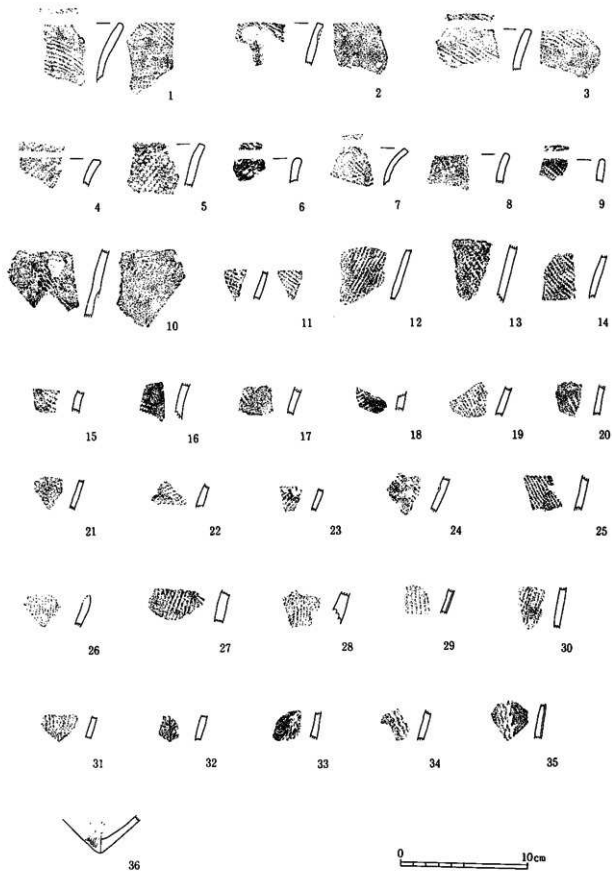


插图30 SD04 出土土器



挿圖31 遺構外出土遺物(1)



挿図32 遺構外出土遺物(2)

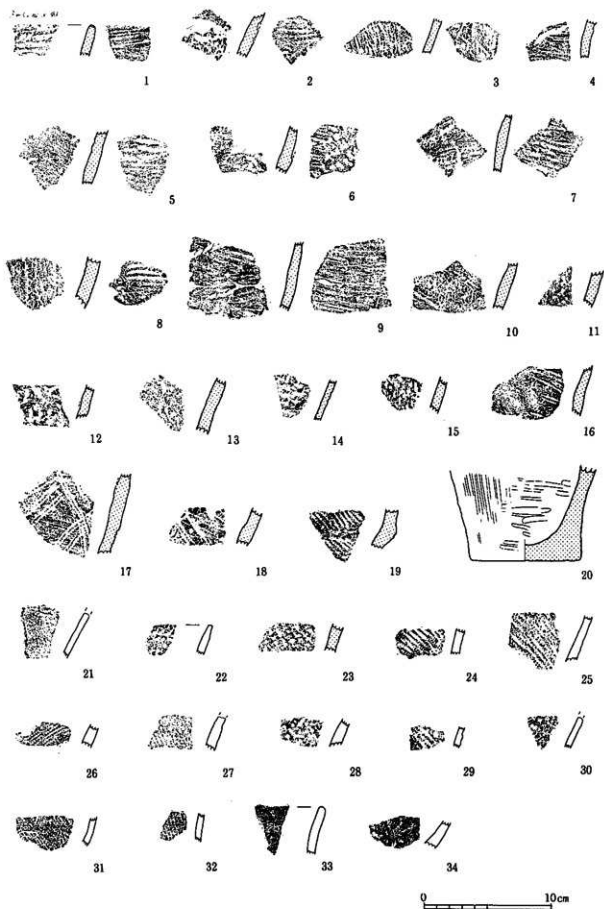


插图33 遼構外出土遺物(3)



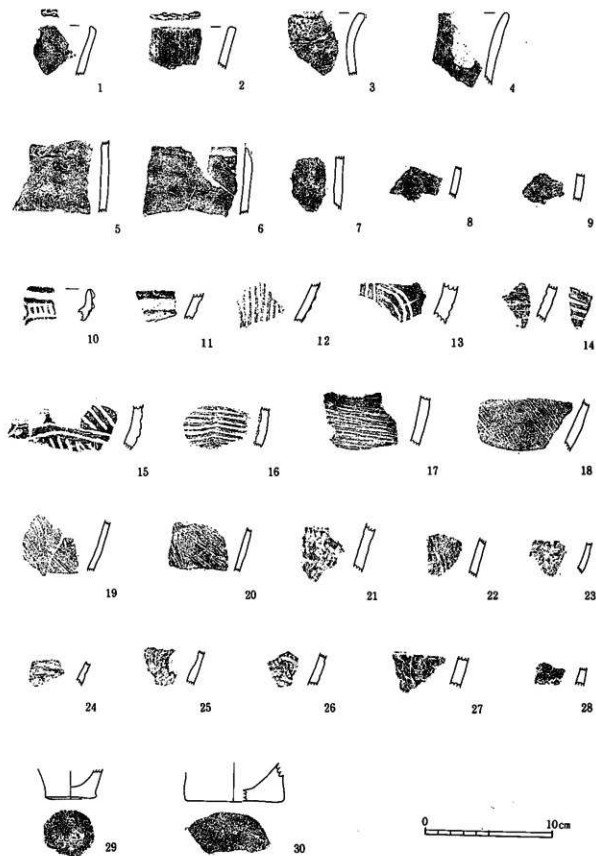


插图34 遺構外出土遺物(4)

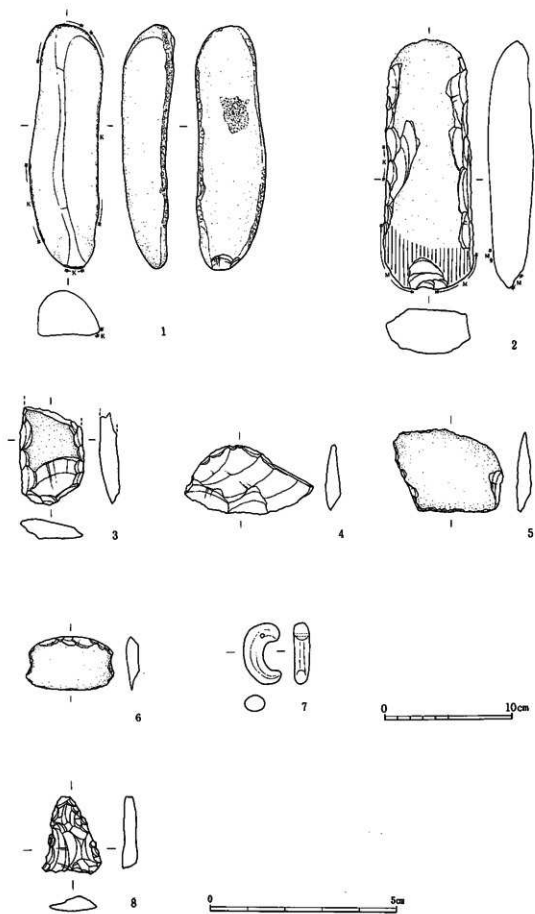
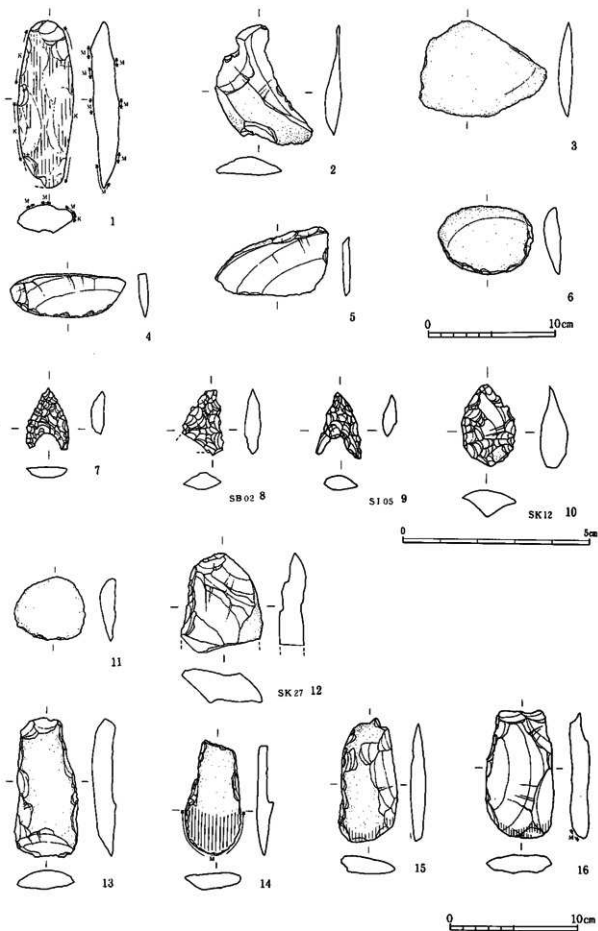
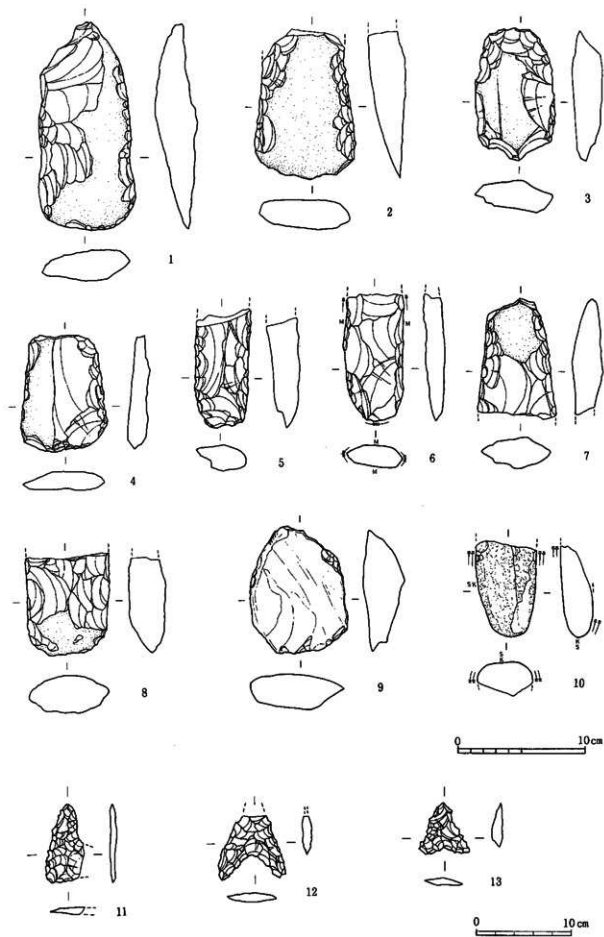


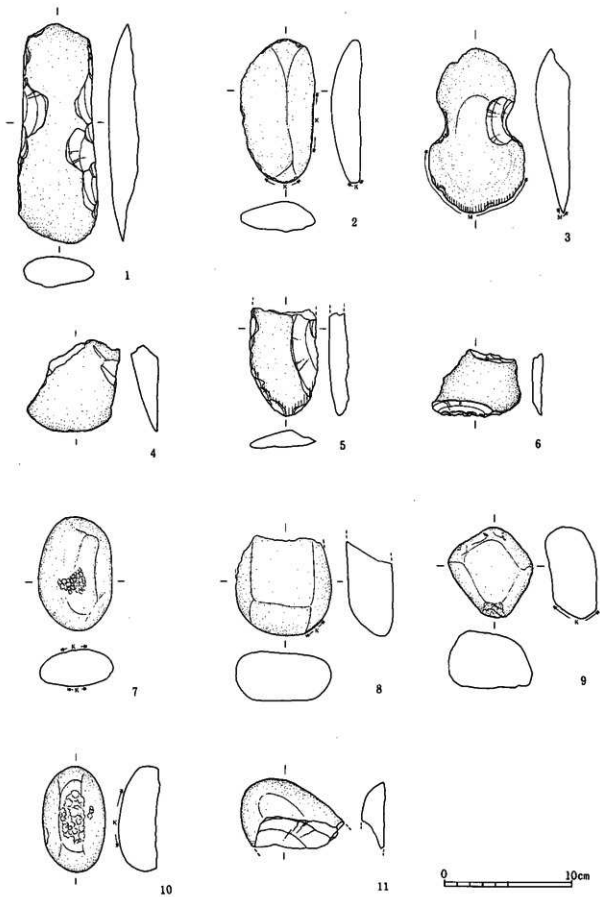
插图35 SB01 出土石器



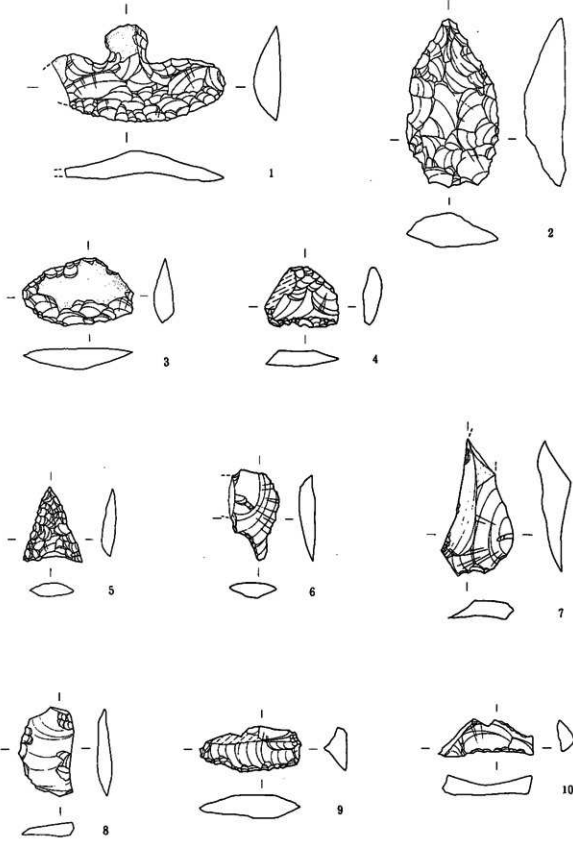
棒圖36 SB・SK 出土石器



神图37 SD04 出土石器



挿図38 遺構外出土石器(1)



押図39 遺構外出土石器(2)

## 第IV章 ま と め

平成8・11年度調査結果はこれまで述べてきたとおりであるが、南大島川旧河床と考えられる産地を挟んで対岸にある美女遺跡と同様に押型文土器が少なからず出土したことは予想外の成果であった。特に立野式を主体とする美女遺跡とは異なり、帯状施文を特徴とする「樋沢式・沢式」が主体となり、立野式と樋沢式が重複して出土しない点は注目する。また、SK13出土の条痕文系土器一団は、飯伊地区で初出の資料であり、その文様構成等の点で東海地方との関係を窺うことのできる土器である。そこでこれらに関する調査成果の到達点と課題を中心に、時代毎の概要を記して今次調査のまとめをしたい。

### 1. 縄文土器の概要

半の木遺跡からは縄文時代草創期から晩期にかけての遺物が出土している。遺物の中でも押型文土器は特筆すべき資料であり、飯伊地区での「樋沢式」・「沢式」の実態が明らかにされる良好な資料である。こうした点を考慮し、縄文時代各期について遺物を中心に概観したい。

#### ①縄文時代草創期

平成8年度調査区AA4・AA6グリットからそれぞれ1点づつ絡条体圧痕文土器が出土している。押図31-1は、太さ1mm程度のRの撚糸を、軸に5～6回1mm程度の間隔をあけ右巻きした絡条体を用い、異方向の密接施文を行い羽状のモチーフを構成している。器壁の厚さは8mm程度で、胎土に細かい長石粒を多量に含み、かさがさした感じを与える。内面に指でなぞったような凹部がみられる。押図31-2も太さ1mm程度のRの撚糸を軸に右巻きした絡条体を原体とし、器面に対し斜方向の密接施文をしている。1と同様な文様構成が推定される。器壁は約7mmで、胎土に1mmほどある長石粒が多く含まれる。こうした絡条体圧痕文土器は近接する美女遺跡（飯田市教委 1998）・木曾郡上松町お宮の森裏遺跡（木曾町村会 1995）等に良好な資料が見られる。

#### ②縄文時代早期前半

平成8年度調査区を中心に押型文土器・縄文土器・撚糸文土器・無文土器が見られる。前述したとおり、これらの土器の多くはグリット出土のものである。また遺物の出土状態・詳細は観察表等に記している。

押型文土器のうち押図31-3は、平行四辺形状の格子目文を器面全体に施すことを特徴とし、胎土に白色粒子を多量に含む厚手の土器である。押図31-47～49は、振り幅が大きく波長の長い山形文の密接施文を特徴とし、胎土に長石・白色粒子を多量に含む厚手の土器である。51は、棒状の素材を長軸方向に山形文を刻んだ原体を回転施文しており、長石・石英粒を多量に含む厚手の土器である。これらの土器群は、施文原体・胎土等の特徴から立野式に比定される。

一方、押図31-52・53は胎土に繊維を含み、楕円文+山形文(52)、楕円文(53)の密接施文を特徴としている。こうした特徴を持つ土器群は、隣接する美女遺跡からも出土しており、繊維が入る東海地方東部の土器群との関係が指摘されている（飯田市教委 1998）。

早期前半土器群の中で主体をなすのは押型文・縄文の帯状施文を特徴とする樋沢式および同時期と考えられる撚糸文・無文土器である。半の木遺跡出土の樋沢式の文様別構成比は山形文が約55%

を占め、縄文施文が約40%、格子目文が約5%となる。山形文の原体は条・単位数のわかるもので、2条2単位あるいは3条2単位が主流を占め、原体長は1~2cm以内と推定される。これらの山形文は、振り幅が小さく波長も短く、立野式に見られる山形文とは異なっている。また、これらの土器群の胎土には、長石・石英等を多量に含む一群と金色の雲母片を多量に含む一群に大きく大別される。また、挿図31-14・41は山形文の帯状施文を特徴とし、胎土に黒鉛を含む「沢式」に比定される。飯伊地区では飯田市立野遺跡に少量見られ、黒田大明神原遺跡では黒鉛が僅かに混入すると考えられる資料が出土している。

一方、縄文施文の土器群は単節縄文を主体としている。このうち挿図32-1・3は、口縁直下に無文帯を持ち、縄文を横位帯状構成に施し、口縁部内面直下に縄文施文する。また口唇部にも同一原体による施文が見られる。7は縄文を縦位の帯状構成に施文している。5は複節縄文を施す例である。いずれにしてもこれら縄文施文の一群は押型文と同様の文様構成をなすと考えられる。この他に32~35のように山形文原体に燃糸文が付加される例もみられる。また、26~28は燃糸文土器であるが、小破片のため詳細は不明である。

これらの土器群の他に無文土器が出土している。胎土は樋沢式と近似し、金色の雲母片を含むものが多く、堅緻な焼きである。塩尻市向陽台遺跡にみられる、いわゆる「軽しょうな土器」は出土していない。いずれも小破片であるため、押型文土器などの無文部の可能性もある。

### ③縄文時代早期後半

条痕文系土器が主体となる。平成8年度を調査区から主に出土しており、11年度調査区からも少量出土している。このうちSK13から茅山下層式土器が1個体、SK28からも図上復元の可能な個体が1個体出土している。挿図29-1は、口縁部に5単位の突起を持ち、胴部に屈曲部を持つ平底の深鉢である。底部は故意に破壊されている。内外面に貝殻条痕が施され、胎土には多量の繊維を含む。文様は口唇部に刻みが見られ、以下に横位の凹線文及び口縁の突起下の縦位凹線文で区画した中に、対弧状あるいはV字状などのモチーフを充填している。凹線文間の隆起部は竹管状工具による刺突文が施される。屈曲部には凹線文による鋸歯状のモチーフが施される。2は、口縁部に突起を持つと推定され、1と同様に屈曲部を持つ。内面には浅い擦痕状の条痕が見られる。口縁部は、地文に縄文を施し、凹線文で弧状・菱形などのモチーフを組み合わせた文様が描かれる。凹線文間の凸部は竹管状工具による刺突が施される。屈曲部は縄文を地文とし、凹線文でモチーフを作り出している。また、有段部には棒状工具による刻みが施される。これらの土器は南信地域での出土例が少なく、駒ヶ根市舟山遺跡・飯田市恒川遺跡群で少量出土しているのみである。

### ④縄文時代中期後半

平成8年度調査区を中心に、SB02より少量遺物が出土している(挿図27)。器面に隆帯を貼付し、空白部に沈線・梯子状沈線を充填する土器群である。飯田市平畑遺跡・喬木村伊久間原遺跡等に類例が見られる土器群で、その特徴から梨久保b式の組成中の楕形文土器に系譜を求めることができよう。また、平成11年度調査区SD04から同様な土器が出土している。

### ⑤縄文時代後期~晩期

平成8年度調査区から僅かに出土している。主体となるのは晩期後半の条痕文系土器群である。断片的な資料で詳細は不明である。



## ⑥古墳時代前期

平成8年度調査区S B01(挿図26-1~13)より良好な土器セットが出土している。小型丸底土器・小型壺・器台・台付甕・甕を器種組成とする。同様なセットは飯田市恒川遺跡10号住等に見られ、小型丸底土器の存在などから4世紀前半と判断される。

## 2. 集落の変遷

### ①縄文時代草創期

南大島川の旧河道と考えられる窪地を挟んで北側に隣接する美女遺跡と同様に、小河川の岸辺における定住が推定されるものの、少量の遺物のみ検出されたため詳細は不明である。

### ②縄文時代早期

押型文土器が集中出土した平成8年度調査区北東隅に遺構の存在が推定されたものの、確認するまでには至らなかった。隣接する美女遺跡では押型文(立野式)の集落が確認されており、半の木遺跡でも調査区外東側から同様の集落が確認される可能性が高い。

早期後半では条痕文系土器を伴う土坑・集石が確認されており、集落から離れた位置にある遺構群の可能性が高い。こうした集石・土坑を主体とする遺構群の検出された例には、黒田大明神原遺跡がある。

黒田大明神原遺跡では小段丘崖下の湿地帯(小河川)の斜面部に条痕文期の集石群が集中し、住居址等は確認されていない。半の木遺跡も同様の土地利用をしていた可能性が考えられる。

### ③縄文時代中期

住居址1軒が確認されたのみである。対岸の美女遺跡でも1軒のみ確認されただけであり、当該期には中核的な集落ではなく、ごく小規模な集落が存在した可能性がある。当該期中核集落としては、遺跡西側に広がる扇状地上に存在する大門原遺跡があり、その関係が注目される。

### ④古墳時代前期

住居址1軒確認されたのみである。飯伊地区での当該期の集落は、低位段丘面に形成されることが多いため、半の木遺跡の所在する段丘面周辺では極めてまれである。遺跡北側に広がる旧河道周辺の湿地帯を利用した小規模な集落が存在したと推定される。

今次調査の結果は以上のとおりであり、遺跡のごく一部を調査したのみに関わらず、縄文時代早期前半の押型文土器が出土した。押型文土器の多くは帯状施文を特徴とする樋沢式で、飯伊地区の類例は極めて少なく、当該期の様相を解明するにあたり多くの情報をもたらす良好な資料である。こうした新知見を加えることのできた半の木遺跡であるが、調査の要因となった道路建設に伴い、急激な開発が進むことと予想される。このため、今まで以上に地道な文化財保護の本旨に沿ったたゆまない努力が必要である。なお、発掘調査にあたり地元の方々をはじめ、調査に携わった方々には多大なご支援をいただいた。文末であるが感謝申し上げる次第である。



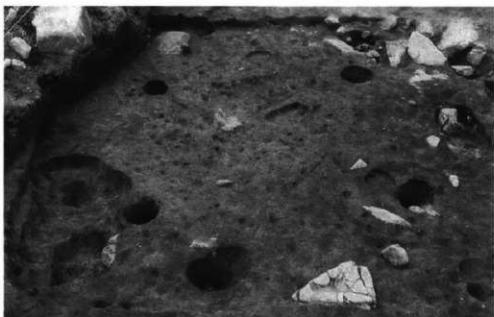
# 写 真 图 版



遺跡遠景



SB01



SB01 遺物出土状況





SB01 遺物出土状況

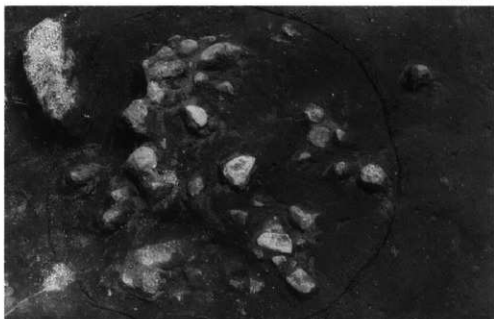


SB02



S101

S103



S104



SK08





SK11



SK13



SK15





SK20



SK21



SK28



上：ST01  
下：SD02

上：SD01  
下：SD04



平成 8 年度調査区(1)



平成 8 年度調査区(2)



平成11年度調査区(1)



平成11年度調査区(2)



調査風景



重機作業風景



現地見学会風景



SB01 出土土器

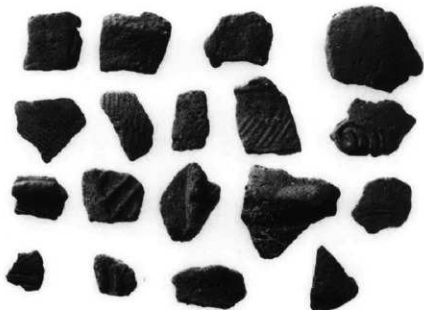




SB02 出土土器(1)



SB02 出土土器(2)



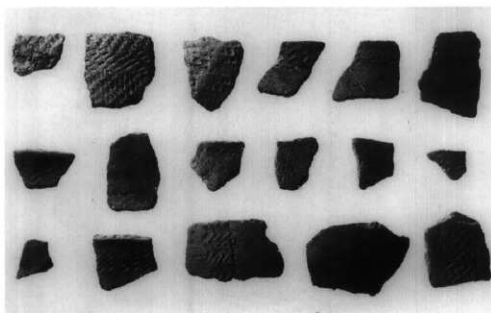
SD04 出土土器



SK13 出土土器

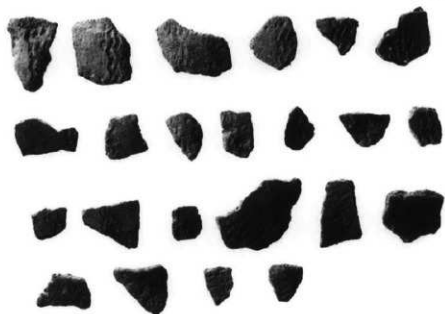


SK28 出土土器

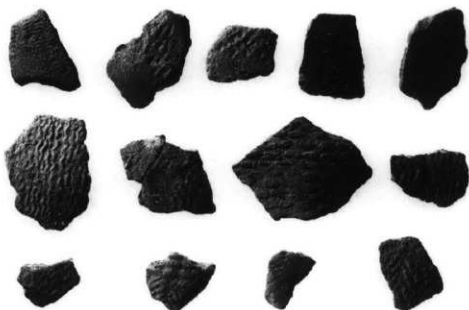


遺構外出土土器(1)

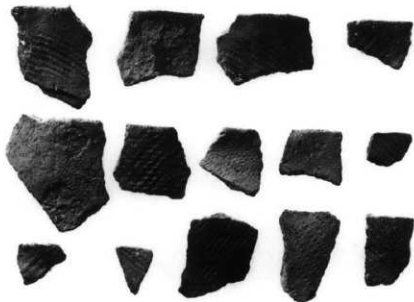




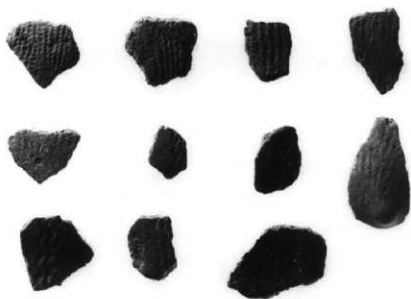
遺構外出土土器(2)



遺構外出土土器(3)



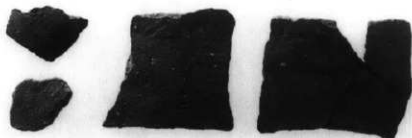
遺構外出土土器(4)



遺構外出土土器(5)



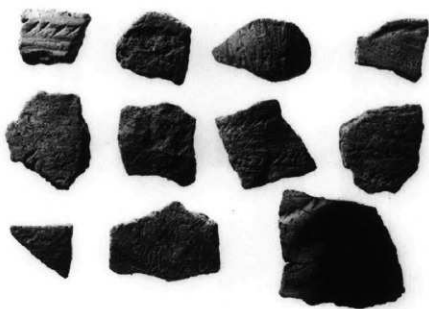
遺構外出土土器(6)



遺構外出土土器(7)



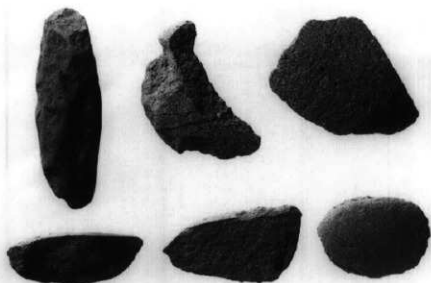
遺構外出土土器(8)



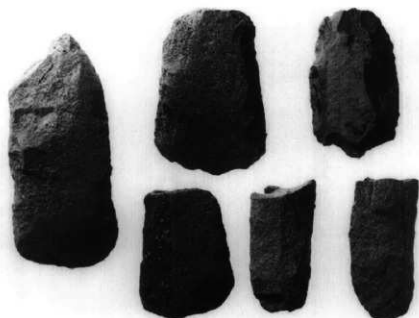
遺構外出土土器(9)



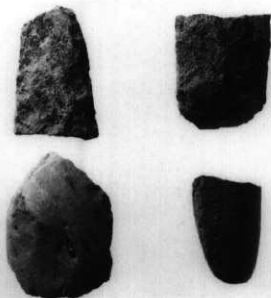
SB01 出土石器・石製品



SB02 出土石器



SB02 出土石器(1)



SB02 出土石器(2)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな		はんのきいせき					
書名		半の木遺跡					
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名		山下誠一・下平博行					
編集機関		長野県飯田市教育委員会					
所在地		☎395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545					
発行年月日		西暦2000年3月10日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 名所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村遺跡番号	°' "	°' "			
はんのき 半の木	いだしぎこうじ 飯田市座光寺	2053	35度 32分 16秒	137度 51分 21秒	19951211 ～ 19960531  19990709 ～ 19990810	939㎡	広域営農団 地農道整備 事業伊那南 部2期地区 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
半の木遺跡	集落址	縄文時代  古墳時代 中世 時期不明	竪穴住居址 土坑 集石	1軒 29基 5基	押型文土器（樋沢式） 多数  4世紀代の土器セッ ト・勾玉	早期前半押型文土 器（樋沢式）の良 好な資料。 土坑内から茅山下 層式土器1個体出 土	

---

# 半の木遺跡

2000年3月10日 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地  
飯田市教育委員会  
印刷 有限会社 発 光 堂

---

